

# 『下田歌子 歌日記』——翻刻——

——下田歌子研究(四)——

大 井 三 代 子

実践女子大学図書館・短期大学部図書館は、下田歌子の

和歌に関する資料を所蔵している。その内容は、幼少の頃から晩年に至るまでの色紙、短冊、歌合、歌会、詠草の記録、短歌を詠み込んだ紀行文、歌論などの草稿などである。

今回取り上げる草稿『下田歌子 歌日記』(以下『歌日記』と略す)は、下田歌子資料として二〇〇四年に古書店から購入したものである(資料番号四八四八)。「歌日記」には、大正十年から昭和二年八月までの短歌、続いて大正五年から昭和七年一月までの短歌、今様のほか紀行文二編が記されている。短歌、紀行文中の短歌、今様の総数は五百三首である。下田歌子資料の中には、その時々の和歌の記録を記したものが散見されるが、『歌日記』のように大正から昭和にかけてのまとまった数の和歌を記録した草稿は他に

ない。

『歌日記』の大正十年から昭和二年の短歌は、文学部として開催した歌会の記録である『竹の若葉』(実践女学校文学部 昭和二年十月)に収載されている歌子の和歌と重なるものが多い。また大正五年から昭和七年の和歌には、図書館で所蔵する文学部の記録(競点、合評、歌合)と一致するものがあるので、文学部の活動状況をより把握することができると考える。また昭和七年までの短歌が記されているので、『歌集 雪の下草』(「香雪叢書」第二卷 昭和七年)の成立に関係する資料と思われる。

本稿では、『歌日記』の書誌と全文の翻刻を記し紹介する。本文中の短歌、紀行文中の短歌、今様に通し番号を付した。またこれらの和歌のうち、『竹の若葉』に収載されている

ものは△を、『雪の下草』に収載されているものは○を、『竹の若葉』と『雪の下草』の両方に収載されている短歌は◎を番号の上に付した。巻末に図版として『下田歌子 歌日記』の影印を掲載したので参照していただきたい。翻刻文に該当する影印の番号を（図版番号）と表記して付した。なお図版には、原本の最後の白紙二十三枚については省いた。

【書誌】

表紙 題簽の書名 「下田歌子 歌日記」 墨書

表紙裏 右下隅に小紙片貼付 「下田歌子様 歌日記」とあり 墨書

小紙片の大きさ 縦五・二糎 横四・五糎

本文 罫紙（青罫線 片面十行）ペン書（黒インク）

本文七十六枚 二十三枚白紙

頁付け無し

草稿本の大きさ 縦二十三糎 横十五・八糎

【翻刻】

門松

大正十年一月

（図版2）

△1 千早ふる神代のためし引くしめも門のこまつはい

か、見るらん

霰

同

△2 熊笹のかこふ岩ねに玉あられみたれてあたる音のはけしき

雛祭

大正十年三月

△3 乳母の手にいたかれたるもましりけりひゝなの殿のみやつかへ人

春日局

大正十年三月

（図版3）

△4 春日山みかさとのむかけなくはこの君いかて千代にあふへき

春雨

大正十年二月

△5 門さしてなしとこたへて春雨のひと日は家にこもりてしかな

若草

同

△6 庭草の根をたゝさりしおこたりもかへりて嬉しめゆる春へは



山吹

大正十年四月

△7 黄金いろにさきほこりても山吹の実をと、めぬや心なるらん

蝶

同

△8 學ひ舎の少女かさてに身をなけしこてふの魂ははなやとふらん

野遊

大正十年五月

△9 いとゆふの遊ふかた野のいつくにかわか花かたみおき忘れけん

山水

同

△10 世にいてん道も求めぬ山の井のみつこの、ろは誰かくむへき

新竹

大正十年六月

△11 子は親にこゆと見ゆ(つ)れとわか竹のしければ同しかけはかりして

採苗

同

△12 若苗にはえて美し早乙女のあか紐たすきましろす

かゝさ

夏月

大正十年七月

△13 吾妹子か白地のゆかたあさやかにうきいて、涼し夕月の庭

瀧

同

△14 雲をさき岩かねゆすりおちたきつ滝のひ、きや神のをたけひ

扇

大正十年(八)月

△15 手束にもみたぬはかりのさし扇しなどの神もやとりかぬらん

蚊遣火

同

△16 空たきのかをりをさへにこめたれとかひの烟はいふせかりけり

秋窓夜雨

同(大正)十年九月

△17 燈火をともとか、けて秋の夜のまと、ふ雨はいつか聞くへき

(図版5)

山人稀

大正十年九月

△18 まれくは門ひらく日もありてこそこもりし山のか  
ひもありけれ

海辺霧

大正十年十月

△19 秋霧の海よりつくわたの原あきのみるめは果なかりけり

遠村燈

同

△20 木かくれの遠山里はぬ羽玉のよるそ燈（削除）火影にあらはれにける

秋里

大正十年十一月

△21 山柿をひさく小店もましろかないなほかけほす岡のへる里

秋山

同

△22 名もしらぬ木の実いろつき耳なれぬ鳥か音しきる秋の深山路

秋懷旧

同

△23 天つ日のひかりかくれしゆふへより秋はかなしきも

のと知りぬる

楠公

同

△24 生かはり死手のたおさの血になきしこゑ雲井にはと  
ほらさりけん

木枯

大正十年十二月

（図版6）

△25 夕日影かたむく軒をこからしのあわたしけに吹き  
渡りゆく

神楽

同

△26 かくら歌霜にさえゆく声きけは神こもとにます心地して

新年

大正十一年一月

△27 道とほし齡はふりぬ年ほきのけふのひと日もあたに  
すきめや

浦鶴

同

△28 たかものうら安しとや海こえて今年もたつのき  
つゝ巢こもる

霞

大正十一年二月

△29 冬枯の梢も雪の遠山もかすみそ春のものとなしつる

鶯

同

△30 雪折の竹の根岸のうくひすはふせ籠の春をわか世とやなく

春山

大正十一年三月

△31 むらさきの霞のそてにつゝまれてのとかにねむる春の山ひめ

苗代

大正十一年三月

△32 苗代につき改めし千町田のあせ道なほく引けるしめなは

(図版7)

梨花

大正十一年四月

△33 學ひ舎へまな子はやりて燕のみいて入る軒になしの花散る

帰雁

大正十一年四月

△34 樺太のはても住むへくなりし世に雁はいつこへ歸りゆくらん

落花

大正十一年五月

△35 きぬかさの上に乱れてちる花の吹雪も重し雨やふるらん

怒濤

同

△36 いち早き人のこゝろにくらふれは荒磯波は高しともなし

夕顔

大正十一年六月

△37 にくまれんみをも思はす夕顔の花をあはれと植ゑてこそみれ

水鶏

同

△38 灰白く藻の花見えて月くらき野川の岸の水鶏なくなり

夏船遊

大正十一年七月

△39 なかれ来るふな歌涼し人もまたなつみの川に棹やとるらし

夏羈旅

同

△40 しかすかに涼しき宿そこはれける夏をさけ来し旅路

ならねと

夏富士

大正十一年八月

△41 夜をこめてすそ野に人のこゑすなり富士の山口けふ  
ひらくらし

海上雲

同

△42 はやち風今かも吹かむ雲の峯くつれて涼し大和田の  
原

飛行機

大正十一年九月

△43 こゝろさし高くをもたれ翅なき人さへ空をとふ世な  
らすや

静女

同

△44 あはれ世をうの花重ねみよしの、雪よりもけに被き  
佗ひけん

社頭杉

大正十一年十月

△45 いかつちのたけひしあともほこ杉に残りてすこし山  
つみの宮

(図版9)

古寺菊

大正十一年十月

△46 法の師にとりすてられしあか棚の菊の香寒し秋のや  
ま寺

落葉埋道

大正十一年十一月

△47 散りつもる落葉しなくは霜とけの垣根の道はゆかれ  
さらまし

暮秋述懷

同

△48 元結におくはつ霜をうちわひてをしみし秋もむかし  
なりけり

落葉

同

△49 わか岡に椎ひらふ子よ紅葉のちりしくかけはよきて  
ゆかなん

暮秋

同

△50 かけこよみ秋はてたれとなれころもかへてをあらん  
寒くしあらねは

炭竈

大正十一年十二月

△51 しつかこるなけ木の煙石炭の時めく世にもなほ消え

すして

冬祝

同

△52

さき草の花はかへりて松竹も事そきたつる門にこそ  
さけ

朝雪

大正十二年一月

△53

夜のほとは雪にあかりて見し窓のあけてをくらくな  
りし窓哉

水鳥

同

△54

堀江川うめたてられて水鳥のこゑとしくに遠さか  
りゆく

早春

大正十二年二月

△55

ち、ふ根はまた雪なからむさし野の木の芽は春とけ  
ふりそめたり

若菜

同

△56

大方は田に鋤き畑にかへされてわか菜つむ野そせは  
くなりぬる

△57

呉竹のよをほと／＼をまもらすはつひにたからの山  
もくつれむ

経費節約

同

△58

男さひ佩かし、太刀の鞘なからをさめましけんとり  
のはやしも

神功皇后

同

△59

春といへはすゝろにものそなつかしき花ゆゑならぬ  
旅寝なれとも

春旅

大正十二年三月

△60

あはれわか手かひの猫は老たれとよるは外にいて、  
鼠をそとる

猫

大正十二年三月

(図版11)

△61

山里の花の便りは聞きなからことしとはすなりぬ  
へきかな

山家花

大正十二年四月

△62

鍬すて、何に都へいそくらん汝か家さくら惜しくや

田家花

同

はあらぬ

△63 花に寝しこてふの夢もさめぬ間にかふこはまゆをつ  
くりそめたり 養蠶 大正十二年五月

釣魚 同

△64 釣りあけし魚こそをとれ舟つなく岸の柳のいとをか  
すめて

池蓮 大正十二年七月

△65 白露のひとつくを玉にしてつきにさゝくる池のは  
ちす葉

檜原 同

△66 大木曾や小木曾の奥のひのき原いつくまでとかたち  
つゝくらん

夏衣 大正十二年八月 (図版12)

△67 色あせし布子の裏をときさりてきたる衣にも夏はた  
つらん

夏枕 同

△68 更けてなほあつき夜半かな水盛りしかはの枕もぬる  
むはかりに

海上月 大正十二年九月

△69 黒けふり低くなひきて大ふねのほはしら高く月その  
ほれる

閑窓雨 同

△70 焼かれつる民草の上を思ふ夜のまとうつ雨にむねそ  
とゝろく

秋夜讀書 大正十二年十一月

△71 ふみを手に取らねはわひし燈火にしたしむ間なき秋  
のよころも

源義家 同

△72 岩しみついくさの神といつきしもこのみなもとのち  
からなりけり

薦紅葉 同

△73 あらし山松にかゝれるつたかつら秋の為とや刈り残

しけん

(図版13)

茸狩

大正十二年十一月

△74

おもふとち落葉集めてかりえたるくさひらやよし昔  
こひしも

爐辺閑談

大正十二年十二月

△75

仮小屋にゐろり開きて故郷のやま家の冬もかたりい  
つらん

除夜鐘

同

△76

うとき耳もかたふけられつ年のをの始め終りをつく  
る鐘の音

若水

大正十三年一月

△77

道の為むすふこゝろのわか水によるとし波は数へさ  
らん

山雪

同

△78

大なみに低くなりぬと人はいへとけ高さそひぬ雪の  
ふしのね

△79

垂柳誰家

大正十三年二月

霞しくさとの中道青柳のめにたつ門は誰か屋なるら  
ん

△80

帝都復興

同

都人つくる家居に先たちてふとしきたてよ国のまは  
しら

門柳

大正十三年二月

(図版14)

△81

いていりのしけきしられて青柳の下枝みしかくなれ  
る門かな

春都

同

△82

やけ残るなみ木のさくらさく見ればさすかにはなの  
都なりけり

故郷春月

大正十三年三月

△83

故郷の花のあるしも変る世ははるやむかしの月もこ  
そすめ

春雨夜静

同

△84

花こよみひとりひらきて更る夜の春の雨さく窓のし

つけさ

春朝

大正十三年四月

△85 大方の花の眠りもさめぬ間の朝廷しめてうたふ子や  
たれ

春駒

同

△86 ますらをかむちに勇みて若草のつまにも駒はなつま  
さりけり

樵路躑躅

大正十三年五月

△87 岩つゝしかた枝は花になりけり柴刈るしつにふま  
れなからも

寄硯述懷

大正十三年五月

(図版15)

△88 吾か為はきすなき玉ににまさりけりこのふる硯くは  
みたれとも

渡頭子規

大正十三年六月

△89 渡し舟棹のしつくとてあふく雲井になくほ  
とゝきす

山百合

同

△90 むら雲の凝りてたゝよふ岩かねに白く浮きいて、匂  
ふ山百合

窓前螢

大正十三年七月

△91 はなちやりしかこの螢のかへり来てまとの机にひと  
つとまれる

夏人事

同

△92 此の夏はいて湯あむへくおほきつるくすしうらめし  
事しけき世に

電

大正十三年八月

△93 いなつまの影の生みたる白玉は雨のとゝめし露にさ  
りける

犬

同

△94 花そのをあらす犬の子にくけれと尾振りて伏せはえ  
こそ打たれね

草庵に虫を聞く

大正十三年九月

(図版16)

△95 夜もすがらなく虫の音を枕にてゆめも露けき草の庵



かな

楠正行弁内侍をすくふかた 同

△96 花さそふ風はふせきて吉野山かさらぬ袖の香こそた

かけれ

萩露

同

△97 雨寒き秋の末野の小萩原つゆより先に花そこほる、

野蟲

同

△98 いつこより分けは入るへきむさし野は虫のねならぬ

草むらもなし

暁霧

大正十三年十月

△99 夜を残すきりのまよひをかことにてまた寝過しぬ明

ぐれのまと

月夜訪友

同

△100

契りても置かぬものから月夜よし夜よしと友の待た  
すやあるへき

漁村擣衣

大正十三年十一月

△101

家にゐてせなはあみすく夜の雨にいを寝て妻も砵う  
つらし

張良

大正十三年十一月

(図版17)

△102

さゝけつるその古杵のあととめて世にかくれけむ  
こゝろ高しも

遠村擣衣

同

△103

遠きぬたをりく風の傳へきてあきは外山の里もむ  
つまし

靴

同

△104

ひちりこをふみて歩みし靴なから大宮の上にのほる  
かしこさ

板屋敷

大正十三年十二月

△105

にひやかた造るかりやの板ひさし霰たはしる音のさ  
やけさ

冬田家

同

△106

争ひしその水口も氷閉ちふゆの山田のさとそしつけ  
き

△107 社頭新年 大正十四年一月  
新玉のとしのよことを氏神にうれしく老もさゝける  
つるかな

△108 寒松 同  
はらひつるふる葉はしきて梢のみさむけになりし庭  
のまつかな

(図版18)

△109 梅の花さきたる宿に客人あり 大正十四年二月  
うとかりしうらみも今日はとけてけり梅さかりなる  
やとをとはれて

△110 孟母 同  
若草のつまのこゝろもはゝきゝのひろきかけにはな  
こみける哉

△111 窓前梅 同  
日数ふる雪に塞さし北窓も梅の匂ひにひらく今朝か  
な

母 同

△112 天の下も動かすものはゆりかこをゆる母の手の力な  
りけり

△113 名所春曙 大正十四年三月  
一たひはゆきて見てしか桜さくよしのゝさとの春の  
あけぼの

△114 土筆 同  
花に身をつくすと無しにつくくしたけぬる春はを  
しまるゝ哉

△115 雨中藤 大正十四年四月  
雨しふく藤の花ふさきぬかさにくけてゆかりの色に  
染めはや

△116 月夜蛙 大正十四年四月 (図版19)  
月かけもおほろゝとかすむ夜は蛙の声もねむけな  
るかな

△117 若鮎 大正十四年五月  
川上にちり浮く花の香をとめてすすきの鮎子のほり  
そむらし

△ 118

ぬき放ち拭ふやかてもつるき太刀清くさやけくなる  
心かな 鵜 同

△ 119

世の人のこゝろもかくや夏木立みとりも同じ色なか  
りけり 新樹 大正十四年六月

△ 120

早苗田の岸にせまりて堀江川あしはらせはくなり  
ける哉 江葦 同

△ 121

みくさ生る野沢の水の音きけは宿らぬ月もすゝしか  
りけり 水樓（邊）夏月 大正十四年七月

△ 122

たからともなさはなるへきちりひちをもてわつらへ  
る都人あはれ 塵 同

△ 123

子らは皆山登りしつわか宿のまつかけしめて独り  
松下納涼 大正十四年八月  
（図版20）

すゝまむ

△ 124

乗れる子か吹く笛のねに聞き入りてうしは帰さも急  
かさるらん 牛 同

△ 125

かりそめに結びしま垣を力にてはかなけにさく朝  
の花 垣朝顔 大正十四年九月

◎ 126

桐一葉まことに音してまきさしゝすたれ吹きこす秋の  
初風 秋風入簾 同

◎ 127

老の身の寢覚の後もなかき夜を雁はいくつら鳴きて  
すきけん 深夜雁 大正十四年十月

△ 128

むさし野の尾花の波は秋きりの海の干潟によするな  
りけり 秋眺望 同

△129 上杉謙信 大正十四年十一月  
仇波のくたけし風の音つれにはし落しけんころろゆ  
かしも

△130 貧富 大正十四年十一月 (図版21)  
玉をかしく人よ汲めかしにこりなきひさこの水に足  
れる心を

△131 老人 同  
身につもるよはひの数は如何にせんこゝろの老はや  
らひてしかな

△132 森杉 同  
目に見えぬ神やますらむいつかしくしめ引きはえし  
森の老杉

△133 行路霜 大正十四年十二月  
市人か火をいましむる声さえておく霜白し都やちま  
た

△134 星 同  
生きものゝ住むはまことか大空にまたゝく星ははし

くいつかし

△135 晴雪 大正十五年一月  
限りなくこゝろのゆくは大雪のふりて晴れたるあし  
たなりけり

△136 笑門福来 同  
さき草のにひ殿つくり仰きみる門辺に梅も笑みこほ  
れたり

△137 柳上に月霞めり 大正十五年二月 (図版22)  
閨の戸にさすとはみえて中垣の柳に眠るおほろ夜の  
月

△138 源為朝 同  
つくし潟なりひゝかしゝかふら矢のみおやの森にを  
れしゆかしさ

△139 春月朧 同  
吾妹子か袖をかすめてちる花のゆくへもわかすかす  
む夜の月

△140 弓 同  
みいくさのにはには召さすなりぬとも家のまもりと  
残れつき弓

△141 月夜踏花影 大正十五年三月  
さくら（削除）花の雲にたちそふ人影はなへてなつ  
かし朧夜の月

△142 行舟夜已深 同  
わか乗れる外にも一つ行く船の火影嬉しき真夜中の  
海

△143 光 大正十五年四月  
よを照らす玉の光もなか／＼につゝみてこそは貴と  
かりけれ

△144 音 大正十五年四月  
餘りにもわか耳鳴りの高ければかへりて音のなき心  
地する

△145 春社 大正十五年五月  
み社の花見かてらにまうて来る人をも神はゆるしま

すらむ

△146 春寺 同  
法の師か文よむ声も眠けにてひるしつかかなり春の山  
寺

△147 活動写真 大正十五年六月  
うつ鼓たちまふ袖もうつし糸に動くは人のこゝろな  
りけり

△148 勤勉 同  
何物のむくはるへきも無くてなほいそしむ蜂にはち  
さらめやは

△149 更衣 同  
白妙の衣手寒しこのあしたぬきし袷を重ねてや着ん

△150 田畝（削除）草取り 同  
にえかへる水田のはくさとるしつの血すふ山蛭にく  
しうとまし

夏雲 大正十五年七月  
（図版24）

△151 雲の峰うこくけしきもみえぬかなわか待つ雨はまた  
しかるらん

△152 夏木立めくれは遠し岩間もる水の音近く聞えなから  
に 夏水 同

△153 夕立の雨のなこりの庭たつみ月になるまで涸れすも  
あらなん 夕立のあと 大正十五年八月

△154 引きあくる網重けにも見ゆるかなも、つやよりし魚  
やかゝりし 網打 同

△155 うつせみのよは秋なれや朝井くむ衣手さむし山の下  
庵 山家初秋 大正十五年九月

△156 鬼神もおそれましやはまこゝろのひとつをさへにも  
たらましは まこゝろ 同

△157 吹く風の音こそかはれ呉竹のはやまに秋はいつこも  
りけん 秋声在竹 同

△158 秋寒き枯野の原に星おちてよはとこやみとなりけ  
らしも 諸葛孔明 大正十五年九月 (図版25)

△159 霜よけの小簾もる風も身にしみて菊の香さむし曉の  
には 風送菊香 大正十五年十月

△160 ちりひちも時雨のあめに洗はれて並木の紅葉色さや  
かなり 雨中紅葉 同

△161 妻戸もる火影に白く乱れてもつもらぬ見れは霰なる  
らし 霰 大正十五年十一月

△162 花紅葉おしゑの箱のふたゝひはかへらぬあとをしの  
箱 同

ひてそ見る

寒夜

大正十五年十二月

△163 閨の中の小瓶の水も氷る夜のせとに目しひか笛の音  
そする

學校

同

△164 火にもやけすなるにもたへん學ひ舎のかたきを子等  
か心ともかな

新年日

昭和二年一月

(図版26)

△165 朝つく日同じ光りにさしいて、やみにかへりし年そ  
ともなき

巖

同

△166 眞鐵路にかたへゆつりてこほたれし谷の巖ははしく  
貴し

春雪

昭和二年二月

△167 深からぬ春の泡雪わか草のつまさへにこそなひけさ  
りけれ

少女

同

△168 直ほなれ清かれ少女なれこそは神の心になふとそ  
聞く

春宵聞琴

昭和二年三月

△169 主しらぬ臘月夜の琴の音はかいひそみてそ聞へかり  
ける

源氏物語 桐壺の巻

同

△170 桐つほの一葉の秋に宮城の、こはきか露もこほれそ  
めけん

遠

昭和二年四月

△171 うち合はぬ人の心のへたゝりは外国よりも遠くてあ  
るらし

近

昭和二年四月

△172 天なるや神のみそのも誠あるひとの爲には近しとそ  
聞く

花吹雪

昭和二年五月

173 かきたれし黒髪の上にちる花の吹雪にしろき夢の手

枕

山躑躅

同

174 岩山にたけたち低く咲きいてしつゝ、しはかくて見る  
へかりけり

行路夏草

昭和二年六月

△175 大方は背長にあまる夏草のひきく<sup>マ</sup>處やもとのかよひ  
路

陰土出山

同

△176 うら安くよはなりぬらし山かけの竹むらかくれ住む  
人のなき

同

177 耳洗ふ人かけもなしやま清水にこりなき世にいて、  
すむらん

桃

大正十年三月

△178 あめ牛の朝乳しほるといそく子の黒髪の上に桃の花  
ちる

雲雀

大正十年三月

(図版28)

△179 雲雀みな空にあかりて足引のやまたの麦生昼静かな  
り

鹿

大正十年九月

△180 はやり男の銃とる頃そみかり野の鹿よ外山にとくか  
くれなん

薄

同

◎181 移しうゑし一むら薄そて垣にあまりて秋をまねく庭  
かな

春日山行

大正十一年三月

△182 春やまの木の下わらひをりもよし子等うちつれて明  
日もまた来ん

菅公

同

△183 君が手に國の大綱ひきしめてもろこし船もとゝめま  
しけむ

葛

大正十一年九月

△184 かけ深きみ谷の眞葛うらうへにたかうらみにはれひ  
かれそめけん



△185 竹 同  
つちかひし園生の竹の子はをやに生ひまさらん千  
ひろなすまで

△186 友に撫子を贈る 大正十二年六月 (図版29)  
撫子もわかちやらしをしといは、うとしと人の恨  
みもそする

△187 美しき児の苺くひたる 同  
荅なすくちひる開き紅のいちこふ、めりはしきこの  
ちこ

△188 撫子 同  
つちかひしをしへの庭のなてしこは唐もやまともあ  
はれとそ見る

△189 苺 同  
口なしのいちこは人に忘られてあかきのみこそ時め  
きにけれ

△190 水樓夏月 大正十四年七月  
月見つ、涼み更かし、池との、かり寝の夢に秋ぞか

よへる

△191 節儉 同  
末つひにこかねの花と咲きぬへし枯葉ひとつもあた  
にすてすは

△192 春夜 昭和二年三月  
價なき月と花とのあたら夜もことしはよそになかめ  
こそ寝る

△193 簾 昭和二年三月 (図版30)  
貴人の軒をはなれて芦簾はな見の小屋に春やまつら  
ん

△194 夏日登山 昭和二年七月  
高山のめくき草花つまてあれな秋まつ虫はよしすま  
すとも

△195 日蓮上人 同  
思ひきや豊秋つ国安かれとつみし言葉につみをえん  
とは

△196

夏山 同  
山姫もひむろ開きて現し世の人にしたしむ時は来に  
けり

△197

古寺 同  
古寺の木彫の蓮色あせてこゝもうき世の秋をみすら  
ん

198

畑大尉（みちゑ子の夫） 飛行機の禍害にて  
みまかられたるをりに 昭和二年八月  
ものゝふの道を尽してくたけたる玉の光のきゆる世  
あらめや

199

軽井沢にものしけるをりに 同  
秋の色をいそく紅葉もあるものをいつまでまよふ夕  
立の雲

200

竹田宮、北白川宮大妃殿下の軽井沢に  
成らせ給ふほとそか御やかたにてつかうま  
つりたる  
うちむかふ心もはれてはなれ山今宵涼しき月を見る  
かな

あひ知る人の招きによりて  
信濃にものしけるをりに

大正五年

201

紅葉の色はまたしきうすひたけ秋のすかたは霧ぞ見  
せける

同じをり依田社にて

202

さなきよりしほる油を汲み見れは虫にもおとる人そ  
やさしき

明倫和歌集に謹解ものすとして

烈公かみこゝろしらひのほと思ひて

同

203

人のゆく道よりみてそ言の葉もやまと錦の色はえ  
ける

204

園守の老そしらるゝなよ竹の千代の数そふかけを見  
るにも

大正六年

205

しめの外に生ひ廣これるなよ竹ももとの根さしはゆ  
るかさるらん

大正六年八月

みゝずのうた

(図版32)

大正六年八月廿二日午前七時卅五分

といふに東京駅を發して箱根仙石原

なる仙鶴莊にものす

206

是も亦我道のため思ひつるやまちをきりの隔てすも  
かな

今日の天氣豫報悪しと聞くわびし

207

その道の博士にとへは今日もまた曇りて雨にならん  
とそいふ

藤沢あたりより雲なびきそめて

日の光りみゆ

208

雨ふるといひし空言思ひしにたかふしもこそ嬉しか  
りけれ

このあたり畑に西瓜あまた

まろびたり

209

民草や直ほなるらん瓜畑(削除) 畠白波よせし跡も  
みえねは

桃畑のみゆるに

210

桃林実もなき枝に紙袋やれて残るがあらはれなるかな

新聞紙に市長の計をのせたり

211

やちまたの道のおく田の奥までもひらかてかれしか  
けそ悲しき

212

国付津をよぎりける頃

(図版33)

つゝみつる雲の衣の綻ひてふた子の山もうまれいて  
たり

213

電車のうちにて  
たちこみし人のいきれのたへかたくあつさ求めにこ  
し心地せり

214

山路にかゝりて

ふもとにや夏は残りし分けのほるみやまの秋は涼し  
かりけり

莊に至りつきてみれば萬清らにとゝのほり

たりいぬる日より来て物取り調められたる

舎監光子のおもとに(山姥とは光子か名の

りつるなり)

215

旅衣ころもへすして住みつきり（削除）しその山姥  
はこゝろありけり

一

莊を仙鶴と号けて

216

あし鶴の千代の名におふみくるまの駐まりましゝあ  
とにやはあらぬ

（さるは今年始めてこの仙石原に東宮の御憩ひ所

成りて成らせ給へればなり）

217

仙人の住むめる家の石すゑのゆるかぬ道もこゝに定  
めん

（図版34）

218

仙人のかひの鶴の背にのりてあまつ乙女の峠こえ  
はや

○  
219

この莊は青木副校長の早くより何くれの心  
しらひされたりしかやうく落成しつるに  
いたはる事ありて今度はえまうで来られ  
ざりければ  
もろともにとはぬうらみを葛の葉のかへすくもか  
くる宿哉

次の日は所に稀なる快晴なれば日頃勞きつ

る

人々をもねぎらひてん比の夏を都にとゞま

りて物習

ひにいそしみたりしをしへ子たちをあて芦

の湖に

ものせんとすされど己れは駕にてと切に

人々の

云ふに任せて丁呼びにやるほどいと待ち詫

し

220

待てとくこぬ山駕の詫しきにつるの翅のからまく  
ほしも

宇大原という原野を過るほど

221

機織女打ちしきり鳴く野辺みればたゝ一つらの錦な  
りけり

222

花に寝る蝶のはそても朝露にぬれてすゝしき小野の  
中道

湖尻といふ所に至るほど

（図版35）

223

若かりし昔は近くおもひつるみちはるかなり老やし

つらん

224 久方の月の宮人あそふらし雲井に高き冠ヶ嶽

225 秋の野の初穂の薄袖せはみうひくしける招きそめ  
たる

226 芦の湖をわたるとて  
今もなほ真袖にかけてしのふかなそのかみ山の木々  
の下露

○  
227 駒ヶ岳をのぼ(削除)そみて馬すゝめたり  
し事を  
思ひいで、  
駒ヶ岳駒にまかせてのほりつるむかしのあとを心に  
そとふ

228 湖上にて  
何といふ木の実なるらん紅の玉をつらねて水に浸れ  
る

229 敷島のやまとゑうつす山水にとつ国ふりの家そつき

なや

(これなからましかばとこそおぼえしか)

(図版36)

湖畔の橋本樓といふに昼食ものせん

とてのぼる

230 関屋見に人はゆきけりのひらかにあしの湖さし出  
て、見ん

231 戯れに豆とあだ名いはるゝはした女をよめ  
る

豆やくゝあなまめくしいち早くあるしも措きては  
しけ出にけり

大原越に富士よく見えつと人はいへど  
われは知らざりき

232 花野原眠れる蝶の夢路にや我も入りけん現なからに  
ここより湖上の見渡し

233 まほあけて小舟こきいてぬ朝北の風や南に吹き変る  
らん

まひる過る頃戯れに

234 玉くしけ箱根あさりて物食はん仙石原は空しかりけ

り

箱根神社にまうで、

235 神垣にぬさ奉りたち出つるすきの下道風清くして

人々の右左より手とりなどしていたはり

(図版 37)

くる、にのみたるされ歌

236 道のをやのかひこそなけれをしへ子にたすけられ  
つゝのほる坂道

かへさの湖上にて思ふ事を

237 追風にまほ打ちあけてゆく舟のはやくも道をすゝめ  
てしかな

釣すとして

238 寄りも来ぬ魚につられてとゝめたるあしの湖面うみ  
はてにけり

人々をそゝのかして大涌谷に向ふ

239 つゝら折り駕にのる身も侘しきをかく人いかに苦し  
かるらん

小川あり子の恙ありて後れたるに

240 引きつれしいさゝ小川のいさゝかもよとむときけは  
胸とゝろきぬ

姥子といふ所に臥さすとして

241 むつまじき姥子の名をそ頼むなる病めるをとめを残  
し置くとて

心地悩ましとて莊に止まりたるむつ子が上  
を思ひいでゝ

242 いとほと(削除)しと心とゝめて来しかとも中空よ  
りはなほ増りけり

(図版 38)

大涌谷にて

○  
243 湧きのほる湯の音凄まし炎ふく風なまくさし谷の岩  
かと

244 大地獄あな怖ろしとをのゝきて極楽茶屋に集ふ子や  
たれ

かへさの野辺に千種美しう咲き乱れたるを  
をりつれは蓬に似たる香のいと香はしき枝

あり

何ぞと見れば藤袴なりさては「主しらぬ香こそ匂へれ」

といひしは正にこれなりけりと思ふていと

なつ（削除）をかしく

245 山にといひし人の言葉もちりぬへく匂ふすそ野の藤袴かな

其夜人のおくりたる蜀黍を食うべて戯れに

246 やまと歌も今宵はよまでもろこしを思ひのまゝに食みつくしけり

247 もろこしを食むとないひそあなかしこ壁にも耳のありとこそきけ

次の日も亦

248 今日もまたもろこしかはらに満ちぬればやまと煮豆もほしからずして

今朝は霧深かり

249 山姥やとりかくしけんなつかしき乙女の姿みえすなりたる

（図版39）

女郎花へ交りたる同じやうなるが白きを

男へしといふと人の告げければ

250 男やもあなしらゝしかしましと聞きし女は口なしにして

寿子が昨日山路にて穿物の緒切りたり

つれば今日その代り需めまほしといふにこの里には

あらざめりと人のいひければ

251 しくものも無しとけしきはたゝへしかはくもの無しと聞けはわひしも

文披きて独り

252 山里はしつけかりけり白露のひるまも虫のなくね聞えて

253 みやまちの露分衣袖寒し都も秋の風やたつらむ

よべ火によりし蝶の文の中におし

へされたるを見て

254 八千種の花野の霧にまよひつるゆめの小蝶のゆくへなるらん

毛並は美しからぬ顔のいと愛らしき

犬のよく馴れたる何時よりか飼ひつると問

へばあらず里人のなりといふ

255 物くるゝ人を主と思ふらんさとの子犬の来ては門も

る

食物多くなりて却りて運動もえせず

(図版40)

なりぬと人々のいふに

悔しくも物足りにけり山姥の山めぐりをも見るへかりしを

をしへ子たちの心しらひを嬉しみつゝ、

まな子らに肩ひねらせて文よみて倦めは花野にたゝすむ吾れは

人々とすすろ歩きして今昔の感にたへず

篁分けて昨日かとひし山里のかきねの道に車かよへり

莊より野菜もとめに行くといふ宮城野

はそばの名所なりとぞ

宮城野の露のゆかりの萩ならでそはくしきもにくからぬかな

廿五日は晴なるべしといへばまたにて

乙女峠にのぼりて富士みんと契りつるに雲いできぬ

260 ちらきもの心も空になりはてゝ雲のまよひにまよふ

今朝哉

261 雨となり雲となりても契りつる乙女峠はこえんとそ

思ふ

262 晴れぬとて出つれば曇り曇るとて入れは晴れゆく浮

雲あはれ

又少し晴れたり

263 やよをの子山かこもてこ仰き見る高ねの雲は披きそめたり

(図版41)

人々と出でたちて麓にいこふ

264 美しき乙女を見んと打ちつれて先姥か茶屋とひてける哉

のぼりもて行くほど

265 よしあしか薄かあらす音に聞く風知草の茂みなるらし

266 仰ぎ見て梢たちまち足もとにかはる高根のつゝらをり哉



峠にて

267 山姫や雲のとほりをかゝくらん裾野はつかに見えそ

めてけり

268 心こそ打ちひらけゝれふしの根のすそ野はかりの見

渡しなれと

富士か（削除）

269 富士かねの高根皆から見せぬこそさきりの深き心なるらめ

今はとて帰途につく

270 風もまたしらぬこかけのしの薄まねきかねてや打ち

なひくらん

午後二時より仙石原小學校に人々

あつめて訓話す

271 これも亦君が民草しをりして人のふむへき道開きて  
ん

（図版42）

其夜人々と茶菓ものす

272 思ふとち談らひ居れば木の葉散る秋のみ山ものつけ

かりけり

その夜

273 ともし火の光りに見れば谷一つへたつる里も程ちかくして

廿六日今日は都に帰らんとするに人々例のものもて来

274 今日も亦もろこし得たり空にみつやまどくにはら満ち足らしてん

千種をあさりて

275 たをらんも惜しき山路の花千種根なから庭に引き移さまし

276 匂ひなき言の葉草も思ひ出のたねとし見ればすて難くして

立ち出でんとする程

277 山畑の胡瓜色より（削除）し里人にこひて都のつとにしてまし

比村人のいと懇ろなる心しらひを喜びて

278 浅からぬ人の心は雲深き山里にこそ見るへかりけれ

山を望みて

279 低く見え高くも峯の仰かれつくもの心にたくふ山は  
も

280 別れゆく雲の彼方に又一つこゝしき山のそひえたち

たる

(図版43)

莊をかへりみして

281 今こんと契り置きてもなりところさすか余波のをし

まるゝかな

山姥はなほ殿せんとしてとまれり

282 雲の波立ち騒きても過ぎゆきし早川のへやしつけか

らまし

みゝずはまことは歌はぬものぞと人の  
いひければ

(図版44)

諸共にとて出てたちつる人々の荷物おくれ  
たりとて湯本にとゞまりぬるか出て来たる

いと本意なし

283 早川の流れ早くも下りきてこゝによとむか口をしき

かな

こゝにて家づともとむ

284 花かたみめにつく物そなかりつる病める友には何を

送らん

同じ時留守居の生徒達へ

吾が自動車湯本より仙鶴荘まで昇

りは一時七分間降りには僅かに四十分なりき

285 かくはかり速き車あり天かける鶴の翅も今はたのま

し

湯本にて

286 秋風のそよとも袖にかよはぬはふもとに夏やなほ残

るらん

この歌日記に命名すとして

287 水清き山のとかけにうこめきてうたひし居れはみゝ

つとやみん

288 うたひてもうたふかひなき禿山のこしをれ歌にふさ

はしき名そ

大正六年十一月末上級生修学旅行  
の際京都より留守居の職員へ

289 園守の蔭をそ頼む雛菊の霜おほひてよ風ふせきてよ

り来ん

290 残し置きし教への庭の姫小松待つらんものを今かへ

り来ん

謝恩会當日卒業生へ 大正七年三月

291 培ひし園の姫松まさきくてまさきのかつら生ひ栄え

なん

292 打ちつけるにまぬもよしや別れてふことの葉草はつ  
ゆしかゝれは

293 同じ時同窓会諸子へ

かりそめのいたつきよりも苦しきは今日のまどゐに  
入らぬなりけり

294 諸共に菊はかさゝんこん秋の千代のかけにはもれす  
もあらなん

(図版45)

295 己未の元旦に  
仰ぎ見る峯にのほらてやむへしや羊のあゆみよしお  
そくとも

大正八年七月十八日没

副校長青木文造ぬしが柩をおくる歌

○ 296 學ひやの松の常磐に残るへき勲功やつひの形見なる  
らん

○ 297 空蟬のからは消ゆとも夕露のたまはとゝめよ撫子の  
上に

大正九年四月廿五日信州北佐久郡平根村字  
平尾なる守芳院主岡本氏の請ひによりて

そこにもとのせんとす(削除)て出でたつそ  
は吾が生家の

中興の粗平尾家の古城趾其のあたりにある  
よしはかねて傳へ聞き置きたる事ながら  
かくさだかには如何でか知るよしあらんさ  
るを

こたび岡本氏が好ひ(削除)み心によりて  
遠祖

298 源經基朝臣よりつぎ／＼記されたる系譜  
を見ることを得しはこよなき幸ひなりけり  
すゝけたる紙も貴し遠つ祖のおもかけ浮ふ水荳のあ  
と

299 出でたつ日に先立ちて畏き事のありけるに  
み恵の露の光におくつきの木の下道もまとはてそ  
入る

(図版46)

暁深く行装きたつ程雲暗く重なりて  
雨も降り落ちぬべき景色なるに

300 心先はるゝ旅路に浮雲のなとかくはかり立ちまよふ  
らん

○307

この里は浅間かたけの近ければ春なほ遠き心地こそ  
すれ

301

勇みたつ心や天にかよひけん雲うちなひき日影もり  
来ぬ

汽車の中にて

302

鈴葉畑麦生につゝ野の末にしら帆そ見ゆる岸近み  
かも

303

うへしこそ花の吹雪も寒からめ雪なほ白し遠方のみ  
ね

304

露のたう餘多見ゆなり軽井沢谷間の春は浅くやある  
らし

比のあたりのつゝじは大方紫なり

○305

春の日にもゆとも見えぬ岩つゝし色のゆかりは深き  
ものから

御代田駅に下りて迎への車にのり檀頭糊

沢氏に案内せられて平尾に入るほど

○306

遠つおやのみあととふとて一とせにふたゝひ花のさ  
かりをそ見る

308

梅桜枝をましへて一時のさかりをきそふ春のやまり  
守芳院に至りつきてかたばかりのみそぎ

(図版47)

して祖先の霊位を拝みつ畏き御菓子

奉るとて

309

遠つおやのみたまうけませ旅衣つゝむにあまるみ恵  
のつゆ

十六人の僧達讀経行道などせらるゝいと貴  
し

310

法の声も昔にかよふ心地してその世こひしき花の夕  
かけ

かくて事はてゝ後正法婦人会の為に

婦道を講じけるほどあまりに会衆多くて

堂の根太落ちたりといふに

311

平根なるみ寺の根太の落ちにきと佛も見てや打ち系  
ますらん

(こは平尾横根二村を合せて今は平根とい  
ふよしきゝたればなりけり)

女郎花の一時をなくねりそなど説き出でん  
も

をりからつきなくこそは  
 比の守芳院は数十代前の祖なる守芳なる主  
 が  
 開基なるよしなど物語どもして歌一つと院  
 主の  
 請はれけるに  
 法の道栄えさりせは遠つ祖のあともさやかに残らま  
 しやは

(図版48)

夜に入りては寒さのいいたう身にしむ  
 まゝに  
 衾重ねそへても猶夢路冷かに覚えつるされ  
 ど

宵の間の雨だりの音更けて後は絶々に成り  
 ぬる

はをやみやしつると暁方妻戸押し開けて見  
 出したれば庭の白う見渡されたる雪にこそ  
 ありけれ

やうく明けはなる、光りに見れば

313  
 さほ姫のかすみの衣中絶えて雪の白きぬかけ渡りた  
 る

ぞ、いともく珍らかなる

深山辺は春の心や浅からし雪も桜もともにちりつ、  
 よべの更科のそば今日の朝げの山の芋のと  
 ろ、汁

など處につけたる精進物の院主が心しらひ  
 もいと

嬉し、かゝるほどに平尾大社八幡宮の

社司夫妻訪らひ来て社は平尾家氏の神に在  
 し

城主栄えられける頃は四季をりくの御祭  
 りも

いと花やかなりしよし現在の拝殿は守芳主  
 が再建せられたるなりなど語らるいと貴く  
 も懐し

ければふりはへ拌みもて行かまほしけれど  
 今日の

午前にと岩村田の実科高等女学校にて講演  
 の事契り置きければ如何はせんみてくらの  
 しろ

のみを社司に頼みて出でたつ 岩村田は

(図版49)

晝過る頃たちて小諸の学校にもたちより  
 講演をへて帰途にのぼる 岡本氏等には

こゝにて別る

315 軽井沢にかゝれば雪の積る事一二寸なりき  
もへそめし若葉か上（削除）うれにふる雪はにくき  
ものから懐しきかな

磯部をはなるゝ程行き違ふ汽車の中には  
兵士餘多見えて万歳の声こゝかしこに  
起りぬ

316 梓弓八幡の神にいのる哉みいくさ人にさきくあらせ  
と

心の中にそが前途を祝福してかへり見  
がちに行き別れつ 今日はいたう労れ  
たるにや夜に入りては万づ物も覺えず夢路  
より夢路をつたひて雨の音におくられつゝ  
都にぞ入りぬる。

317 故副校長青木文造主が一周年のみまつり  
にたむけまゐらせたる歌 大正九年七月  
學ひ舎の手向の水は浅くともふかき誠はくみてしら  
なん

318 よきにつけあしきにつけていくそ度あらましかはと  
うち嘆きけん

（図版50）  
大正五年の秋日光に遠足せし人達へ（生徒  
職員）

319 たましくしけ二荒の山に子等をやりて残る都の秋そ淋  
しき

大正十年八月誕生祝の時の兼題

寄巖祝

320 おひ松に小松の千代のかけそひて峯の巖も高くみゆ  
らん

大正十一年八月 同上

寄道祝

321 皇の道<sup>い</sup>弥ひろに日の本の海の外までおし開きてむ

322 杖となる竹の子の道いや榮に榮えん極み共に分けま  
し

大正十三年

年のはじめに復興のこゝろを

○323 新しき都つくり<sup>に</sup>に先たちて心にたてよ国のまはしら  
甲子の年のはじめに

○324 新しく都つくととききつれし初荷にきはふ市の八街  
をりにふれて 大正十四年十月

○ 325

貧しとは何か思はん眞玉にもまさるをしへ子餘多も  
たれば

ことし古稀といふ年を迎へつる  
わか爲に賀宴開かんと人々の勧め

(図版51)

らるゝを辞ひて来ん年新校舎落成の

折にをと云ひ渡りつれどさらば佳例の

誕生日にそが心しらひ少し加へてと云は  
るゝ

それをしもいなみかねてなむ 大正十四

年八月

寄文祝といふ事をよめる

○ 326

わかためのことほき文もよみそへて積るよはひを更  
にしりぬる

○ 327

浅からぬ道の愛子のこゝろさしいなみかねてそこと  
ほかひする

○ 328

學ひ舎はまた少女なり身につもるよはひもいはし老  
も思はし

同じ折に

人々より贈られたるどもを後援會によする

○ 329

とて  
學ひ舎は築きかためん浅からぬ人の誠をいしすゑに  
して

古稀の賀延に(削除)開く折しも新校舎  
落成の砌なりければ寄柱祝といふ

ことをよめる 大正十五年十月

330

まこころをいしすゑにして道のため太しきたてん眞  
金眞はしら

331

をしへ子か柱となりて(削除)末の末迄榮ゆらんま  
かねの柱みれば頼もし

(図版52)

○ 332

森蟬 昭和二年八月  
うふすなの森のこかけは蟬取の子等か声さへかしま  
しきかな

333

温泉 同  
人気なきよるの湯ふねの底くらにひたるは月と吾と  
なりけり

334

薄風 昭和二年九月  
吹きかはる風の心を見つるかなそむく尾花か袖のう

らみに

夕月

同

335 散りそめし一葉の秋をほのかにもつゆに見せたる夕月のかげ

秋霜

昭和二年十月

336 背戸に出て、早稲田刈る手もか、まりぬ初霜早き秋の山さと

汽車

同

337 洞の中をぬけつく、りつ行く汽車のけふりもつる、谷のそはみち

双思樹のはしに

昭和二年十月

338 実にならむ秋をも（削除）そ頼むさきそめてまた春浅きことの葉の花

芹沢氏の學校へ

昭和二年十一月

（図版53）

339 甲斐かねにぬきいて、しけれ直はなる道をまなひのまとのくれ竹

昭和二年明治節の日の集ひに

寄社祝といふことをよめる

340 弥栄に道はさかゆくくれ竹の代々木の黒垣仰きてそ

しる

341 かしこくもよ、きの宮にわたくしの慶ひをさへ先まをしけり

（巻き二のはじめ）

朝時雨（今様）

昭和二年十一月

342 夜をさむしろに起きあかし  
とに  
明けてまどろむ閨の

なきて餌をこふ雀の子 はねやしほれん毛やぬれん  
あな心なの村しくれ またしき枝は染めすして

ふるかひもなき古簾 かゝる軒端にかゝるらん

窓前霰（同）

同

343 矢なみつくろふ掌の上に ふりし昔を思ひ寝の  
夢をやふりてはらくと 玻璃の窓うつ玉霰

時雨

同

○  
344 寒けにも落葉かく子のかげ消えて時雨に暮る、岡のまつ原

寒草

同

345 つく／＼と見れば荒野の霜にふす草のいろさへ千種なりけり

暁千鳥

昭和二年十二月



346 暁の老か寢覚の友千鳥みちひるしほにかた違へすな  
(図版54)

歳暮祝

昭和二年十二月

347 瑞々し玉の光を身にあひて老もわかやく年の暮哉

航空隊 故河崎大尉のみたまに

手向けたる 昭和二年十二月

348 ものゝふの道の光りとかゝやきぬ落ちたる星は悲し  
けれども

寄神祇祝といふことをよめる歌

昭和三年十一月

349 神まつる今日のよき日をよしといひて老かためにも  
いはふかしこさ

350 この道のまな子の千世を祈るこそ思ひなき身の願ひ  
なりけれ

昭和三年を迎へて 昭和三年一月

351 萬代とほきて仰かむおほみのりおこなはるへきとし  
の初日を

馬上雪

同

○ 352 黒駒もはたれに白く成りにけり雪のいく里越えて来  
つらむ

早春鶯

昭和三年二月

○ 353 春浅き谷ふところに聞ゆなりまたかたなりの鶯のこ  
ゑ

錦

同

354 うるはしく飾るにしきの裏表かはるせさかの世にこ  
そありけれ

(図版55)

名所花

昭和三年三月

355 小草にもその名にほひて桜さくあら川の辺の春そは  
てなき

幡桜姫の皇后

同

○ 356 はたひもて織れる錦の戸張には龍のあらひもとゝめ  
られつゝ

朝花

同

357 朝戸あけし店も少なきほとにこそ都の花はみるへか  
りけれ

美人

同

358 さきほこる花もそちらん心せようまし少女か袖の追  
風

雉

昭和三年四月

359 桜ちる片山林はる雨のはるゝあさけにきゝすくな

り

嬉しきもの

同

360 ともかくもあやまちなくて過ぎし日をかへり見る夜  
そうれしかりける

(図版56)

首夏

昭和三年五月

361 しめはへしゆきの大御田わさなへの緑に夏の色そほ  
のめく

軒橘

同

362 子規なくやいつこと窓押せは軒の橘かせにかをれる

帚木の巻(源氏物語) 昭和三年六月

363 桐つほの雨の夜かたり聞きしよりしのふの露もみた  
れそめけむ

夕顔の巻(同上)

同

364 中空に消ゆらんものを月かけのやとるもはかな夕  
のつゆ

梅雨久

同

365 さみたれは晴れんけしきもみえなくによしさは衣と  
きあらひてむ

垣夕顔

同

366 花をこそ見むとうゑしかにくけなる身も捨てかたし  
垣の夕貞

樹陰夏月

昭和三年七月

367 わか葉には音せぬ風を夏木立もる月影のゆらきにそ  
しる

繭

昭和三年七月

(図版57)

368 いふせさをわひしなかめは晴れそめて妹かかふこそ  
まゆこもりせる

美し

昭和三年八月

369 舞扇さす手にゆらく玉たれのひかりこほるゝ月の高  
殿

醜し

同

370 いと、しくみにくきものは負債して飾る指輪のまた  
ま白し(削除) たま

月夜鹿

昭和三年九月

371 今宵また妻とひわひてかへるらんこゑなき鹿の月に  
たつ見ゆ

○ 372

風前雲

同

ほこ杉の梢をつゝむ一むらの雲ふきおとすやま風の  
風

○ 373

古戦場（今様）

昭和三年十月

鬼哭啾々風寒く

陰火明滅月暗し

弓折れ矢つき楯やふれ

せめき疲れし武士か

身は仇し野の土塊と

化して年ふる古戦場

魂はいつこと尋ねれば

むせひし松の声やみて

霜にさゝやく枯すゝき

（図版58）

374

孔夫子（今様）

昭和三年十月

これを仰けはいや高き

夫子か牆は九仞なり

誰かはかゝる牆内の

こゝろの富をうかゝはん

桴にのりて渡らねと

目にみぬ力海こえて

わか日の本のみ教の

道の光りとかゝやきぬ

仰けは高き孔子の徳

375

軍人

同

軍人こゝろにみかけやまと太刀さやに治る世にあへ  
りとも

376

書籍

同

昔今海の内外もひとつにてひろきは文のはやしなり  
けり

377

惜秋

昭和三年十一月

老いて後仰くみのりの畏さにいとゝなこりの惜しき  
秋かな

栗

同

○ 378

うとましきいかもておほふ栗の実もゑめるを見れば  
にくからすして

寒雨

昭和三年十二月

（図版59）

○ 379

雪よりもさむさかへりて身にそしむかれ生にしふく  
夕暮れの雨

冬衣

昭和三年十二月

○ 380

ふりにける身にはふるきの皮衣かさねてかへる春を  
こそまで

かきそめ

昭和四年一月

○ 381

書初の筆の命毛つきすしてまた新らしき紙にむかひ  
ぬ

玉

同

○ 382

事しあらは玉とくたけん人こそはふちになくへき道

もしるらめ

○ 383

新しき朱の鳥居もたてそえて初午まつりいそく村人

初午祭

昭和四年二月

384

わか宿の梅か香さそふ春風はにくきものからなつかしき哉

春風

同

385

見るかきり鈴菜の外の畑もなしとまれよこてふふた心なく

菜花に蝶

昭和四年三月

○ 386

若紫の巻(源氏物語) 昭和四年三月  
若駒のくらまの春の夕かすみゆかりのくさにひかれ  
てそたつ

(図版60)

○ 387

熱海人としほきことにつみそへしなの花うれし霜ふ  
かき朝

菜の花

同

春草

同

○ 388

黒土をもたくる草に新らしきちからもみえて春は  
嬉しも

○ 389

青柳のいと長き日をなかしともおほえぬはかりいと  
まなの身や

遅日

昭和四年四月

390

垣つ田に飼はるゝ小鯉龍の門ぬかむ力のありけにも  
なき

鯉

同

391

古池のあしに匂ふ燕子花むかしの春のゆかりとそ  
見る

池燕子花

昭和四年五月

○ 392

よしあしのなには思はすはや舟のはやきを競ふ鳥の  
あとかも

新聞

同

393

水うてはをしくこほるゝ花うはらしめりて匂ふ香さ  
へなつかし

薔薇

昭和四年六月

(図版61)

○394 豊太閣 同  
中村のしつか軒端のなりひさこよをおほふへきかけ  
とやは見し

395 麦 同  
はつ蟬の声のおちくる山畑に麦刈る人も見えそめて  
けり

396 瓢 同  
あひにあひて聖か友となりひさこ貧しきしもや楽し  
かりけむ

○397 瓜 昭和四年七月  
姫瓜に目はなつくりて薄もの、袖にく、みし昔しの  
はゆ

○398 瓜はめはあまき雫のしたゝりて焼くるか如き暑さ消  
えゆく

○399 紙 同  
うとましきつゝりも紙になる見れは老くたつ身もす  
てはてめやは

○400 物かきて見たくもなりぬ美しきいろ目かさねの紙に  
(図版62)

むかへは

○401 涼しきもの 昭和四年八月  
けつり氷の音も聞えてさら／＼と玻璃のすたれに風  
渡るなり

○402 燭影移水 同  
木の下の流れに影は落ちながらたちとわかれぬ岸のと  
もし火

403 かるかや 昭和四年九月  
雨にふし風に萎れてなか／＼にみたれすなりぬ野辺  
のかるかや

404 いにしへのそれにはあらぬかるかやも風にはあへす  
なほ乱るめり

405 轡虫 同  
くつわ虫野辺になきたつ声しけみ独行く夜もさひし  
ともなし

○406 放ちつる駒はかへりしむさし野のよるをわかよと轡  
虫なく

407 籬菊 昭和四年十月  
霜おほひ造らてあれなませの菊うつろふ色の見まく  
ほしきに

(図版63)

○408

老農

同

ますら男は都にいて、眉白き老人あはれ荒小田にたつ

○409

秋懷旧

昭和四年十一月

うすひの峯の木々の色  
寝覺の里の鹿の声  
若かりし日は大方に  
思ひし事も思ひいて、  
目に見る色も耳にきく  
声音も老か身にぞしむ  
秋はいかなる契にて  
夢とはかなく過し世を  
しのふるつまとなるやらむ

○410

ジャン、ダーク

同

夢の暗示に怪しくも  
奇しき少女はめさめけり  
羊飼ふ手に執りなれし  
鞭を軍馬にあてんとや  
汝かさす方はそも何處  
落日くらきオルレアン  
かさす劍に神宿り  
をとる白馬に靈ちはひ  
軍旗に薰る百合一朶  
進む行手に雲披け  
氷のとさしうち解けて  
朝日か、やふ宮のうち  
春は再ひかへりきぬ  
玉の冠うるはしと  
見しも一時吹雪なす  
かへしの風のすさましく  
戦雲又もたちまよひ  
神の使とあふかれし

(図版64)

身も仇し野の露ならぬ  
炎の中に一沫の

烟となりて消えたれと  
聖きしるしの十字架に  
辛くも最後の口つけし  
神をよはひて安らけく  
魂はのほりぬ天国へ

○411

秋旅

同

汽車のうちに月見つ、行く旅衣つゆけき秋もしられ  
さりけり

○412

弓

同

直ほなる道を、しへの庭にたにとりつたへなむまゆ  
み櫬弓

○413

田氷

昭和四年十二月

さと川に落し、水や残りけむ今朝薄氷の小田にむす  
へる

○414

子からすのふみしたくにもやふれけりくもてに結ふ  
小田のうすらひ

○415

冬人事

同

かせ引かぬ心しらひも老か身は冬のつとめのひとつ  
なりけり

416

みしめなひ小松こりつみ歳の市たつる都へいそく村

人

(図版 65)

鏡餅

昭和五年一月

○ 417

よろひ櫃くらにをさまる世にもなほかちてことほく  
鏡餅かな

雪中梅

同

○ 418

梅の花友にゆるし、一枝もをしとや雪のふりかくし  
(削除) すけ (削除) らむ

海上霞

昭和五年二月

○ 419

日の本の海の八十島も、ち島<sup>ママ</sup>ひとつみとりにかすむ  
春哉

○ 420

北の海の氷のとさしゆるふらんちしまをかけてかす  
みそめたり

紀元節

同

○ 421

とみ山のゆにはにたてしまさかきのさきくと民をま  
つやほかしら

○ 422

はつ国をしらるゝ佳日ほかめやは神のみ子なにやま  
と国民

田家春雨

昭和五年三月

○ 423

なり處花まつ頃の春雨にぬれてや賤のあら田うつら  
む

捨児

同

○ 424

拾ひあけしをの子のうてによりなから乳をさくる児  
のむせかへり泣く

(図版 66)

○ 425

谷川の岸の山吹いろ深しつらなる花はちひさけれと  
も

岸山吹

昭和五年四月

426

駒とめて水かはましをいかにせんきしの山吹さき  
つゝきたり

○ 427

あたらしき石ふみ見えて新墾の功か、よふはるの小  
山田

開墾

同

○ 428

にひはりの畑のすゝなのはつ花にこかねの色を匂ひ  
そめたる

○ 429

心せよ子らか拾ひて食みやせんまた色浅しせとの梅  
の実

梅実

昭和五年五月

○430 水鶏 同  
はかられて水鶏に押し、閨の戸もあけまつ老は悔し  
ともなし

○431 田植 昭和五年六月  
黄はめるせとの梅の実に  
真白手拭赤たすき  
早苗とり／＼後れしと

青田の末も黒むまで  
互みに助けたすけられ  
(図版67)

もろ手は泥にまみれても  
心は清き女夫つれ

錦の袖にいつはりを  
つゝむ都會の妹背には

露たにしらぬむつみにて

○432 鯉幟 昭和五年六月  
屋根に菖蒲はふかねとも  
をのこゝあけし慶ひは

つゝむにあまる柏もち  
うからを集へ友をよひ  
祝ふ軒端の鯉のほり

田植 同

○433 背かひきし露の玉苗吾妹子かとする手もゆふに植ゑ渡  
しつゝ

鯉幟 同

○434 岡の家にをの子やあけしあやめふく軒にのほりの鯉  
をとる見ゆ

天の川 昭和五年七月

435 天の川はかりきはめん道そなき星のちきりはうけす  
なる世も

○436 湖上舟 同  
湖の名の琵琶のしらへも絶えし夜にのこるは月と舟  
となりけり

○437 花火 昭和五年八月  
うちあけし火の雨あひてからかさの落ちくる岸にさ  
わく人波

○438 籠中鳥  
天にはうつ心もなくて籠の中にすたちし鳥のうら安  
けなる

○439 早秋 昭和五年九月  
いちゝくのゑめる軒端に落つる日のかけ暑からすな  
りし秋かな

○440 孝 同  
道といふ道の中にもたらちねにつかふる道そみちの



おやなる

源氏

紅葉賀

昭和五年十月

○441

紅葉のにしきはくらき夕かけにかゝやきのこるいり  
あやの袖

西行法師

ク

○442

高雄山たかねおろしも西へ行く月のかけにはなこみ  
けるかな

庭紅葉

同

○443

夕日影うすれし後も一本のもみちにあかし庭のうゑ  
こみ

尼

昭和五年十月

○444

白萩のちりこほれたる井のもとにあかくむ尼のさひ  
しけにたつ

火桶

昭和五年十一月

○445

老の身ははやく火桶にしたしみぬ蚊やとりのけしこ  
ろも経なくに

猿

同

○446

鶉のまねをからすに強ひしるしもの遠つ祖とはう  
け難きかな

惜年

昭和五年十二月

447

とし／＼に暮るゝをしこそ増りけるさすかに春はま  
たれなからも

梅もとき

同

○448

ひたきなく霜のかれ生の梅もときあかき色さへ寒け  
なる哉

松樹緑久

昭和六年一月

449

幾かへり若みとりして春をへし松は老をもしらぬな  
るらん

鶏

同

○450

紅のとさかふりたてほこらかに朝日あひてもうたふ  
鶏

松樹緑久

昭和六年一月

○451

かけ深き老松の葉の細かにも見ゆるは千代のみとり  
なりけり

松樹緑久

昭和六年一月

○452

中垣のひまもとめつゝひなつれてかけのめとりのわ  
なりけり

鶏

同

か庭にくる

○453

まれにとふ人も音せぬ雨の日をのとかにもなくうく  
ひすのこゑ

雨中鶯

昭和六年二月

庵

同

○454

わか庵は都の場末庭もありて静かなれともたよりよ  
きかな

曲水宴

昭和五(削除)六年三月

455

永き日のかたふくまてを言の葉の花かけめくるも、  
のさかつき

農村救済

同

○456

荒小田の民草の根をかためすはめくみの露もかひな  
からまし

○457

富める人玉の扉をとりこほちしつか伏屋のあまふせ  
きせよ

曲水宴

昭和六年三月

(図版71)

○458

なかれよるも、の盃とりたれと言葉の花はえこそう  
かはね

桃花村

同

○459

垣ゆひし岡への里のも、はやし花にこゆるはとかめ  
さらなむ

○460

あかた人みつきうなかす聲なくは桃さく村はのとき  
からまし

鉾

同

○461

うつ鉾のひとつゝにか、よひて土にしみ入る日の  
光哉

○462

実にならぬことの葉草はすきすてよふときかひなに  
鉾をふるひて

故郷花

昭和六年四月

463

すみすてしわかふる里の庭桜老木の春をとほまくほ  
しも

雲影

同

○464

藻に伏し、魚やひれふる水底にしつめる雲のかけ動  
くなり

名所子規

昭和六年五月

○465

はつ島の月をとふかとほと、きす子こひの森を鳴き  
すて、行

つれ／＼なるもの

同

○466

湯の宿の雨の日長したつさへしふみも見はてつ子ら

もかへしつ

無線電信

昭和六年六月

○467 かたちなくこゑもなくして波枕陸路の友のおとつれ  
そ聞く

468 はり金のいともよらていなつまの思ひをとほくつ  
たへ行く哉

源氏物語 葵の巻 同

○469 葵草つみおかすまて身をすて、なにしかたまのまよ  
ひいてけむ

○470 なきぬらす薄墨ころもいま更にふか、らさりし世を  
そうらむる

葵

昭和六年六月

471 神山の二葉の葵こひとりてむかしを忍ふつまとこそ  
見れ

便

同

○472 しる人もまれになりたるふるさとの便りのなに、な  
ほまたるらん

孟蘭盆会

昭和六年七月

473 とり分きて今宵さ、けむ蓮の飯よみちに餓うるたま

(図版73)

ようけなん

474 迎火は門に薄れてたま、つる窓の燈籠の光そひ行

紫蘇

昭和六年七月

○475 紫蘇の葉をこく手そまりてほのかにもなつかしき香  
の袖にた、よふ

○476 引きすてし小庭の紫蘇の塵塚にし、かみながら根を  
下したる

なよ竹の巻頭に

477 老松の杖ともならむ雪螢あつめしまとにしけるなよ  
竹

○478 ふりつみし雪をふるひてなよ竹のひとりを、しくお  
きかへりたる

夏山家

昭和六年八月

○479 夏もきぬ岩井にひさくそへおかむみやをとめの来  
ても汲むへく

480 夏毎にとふ人多くなりけりのかれし山のかひもな  
きまて

○481 乗る船は今宵港に入りたれとわれは馴れこしかち枕  
せん

旅泊

昭和六年九月(削除) 八月

(図版74)

482

波まくら夜を重ねてもぬは玉の夢は陸路をはなれさ  
りけり

秋野遊

昭和六年九月

483

野辺の千種の花席  
月になる迄歌はまし

みやひの席ひらかせて  
暮るれは虫の音をそへむ

運動會

同

484

あら勇ましの野球やな  
あら心地よの遊泳やな  
あら迅速の競争やな  
あら面白の庭球やな

負腹たてぬほとにせよ  
わさに溺れぬ程にせよ  
氣力のつきぬほとにせよ  
正課にさはらぬほとにせよ

秋草花

同

485

七種の数には入らぬ草ながら秋さく花はあはれなり  
けり

旗

昭和六年九月

(図版75)

486

軍人さゝくる旗のさをはかり残るを見ればかなした  
ふとし

服部順子氏の賀来家へつとか(削除)

487

とつかるゝをほきて  
千代の秋いくらかさねて栄ゆらん今日くみそむる菊  
のさかつき

順子氏が婚儀を賀きて

488

末つひに海とそならむ直ほなるみに順ふやとの眞  
清水

相思樹題歌

(昭和六年十月)

489

外か浜波さわく世も友ちとりみたれぬあとをとめよ  
とそ思ふ

有明月

昭和六年十月

○490

山からすねくらはなるゝ老杉の梢にしろし有明の月

新室賀

同

○491

黒金のま柱造り塗屋建ていはふ新室ゆるく世あらめ  
や

北白川宮

々

492

龍の門ぬきて登らす御光をやかて雲ゐに仰きこそせ  
め

永久王殿下御初任のほきこと奉るとて

493

同鳳凰の刺繍したる物にそへまつれる歌  
君か代の千世やうたはん桐のみをはむてふ鳥は羽う  
ちそめたり

○494 小野小町 昭和六年十一月  
玉簾のをの山さくら一枝たにゆるさてうつる色そゆ  
かしき

○495 項羽 〃

ともにいてし子らはかへらぬ故さとの月をひとりはいかて見るへき

○496 少女 〃

をとめ子はをとめさひしてなよらかにめくゝをあれ  
な若草のこと

○497 ますらを 〃

事しあらはほつゝにむかふ怒り猪のかへり見せぬや  
大和ますらを

干大根 昭和六年十二月

新米のぬかもて浸りほし大根いまし軒よりとりおろす見ゆ

○499 忠 〃

大君に身はさゝけまほこにふれ火にやけ水によし

溺るとも

500 ほきこと

事にあひてなほこそ仰け限なきみそらにたくふ大御心を

○501 新年寿詞 昭和七年一月

(図版77)

新らしき年のよことはふることをくりかへしてもあらたまりつゝ、

神社 同

○502 かしこくも家のほこりと仰ぐかな遠つみおやの神のみやしろ

なよ竹の巻頭に(専門学部) 同

503 世にたゝは巳の(削除)かむきくぬけいてよおなし学ひのまとのなよ竹

『歌日記』本文の53、175、419番の短歌に「ママ」を付した言葉がある。文学部の歌会関係資料に三首の短歌を記したものはなく、転記の際に誤写したのかどうかを確認することはできないが、『竹の若葉』『雪の下草』に同じ短歌が

収載されているので照合してみた。

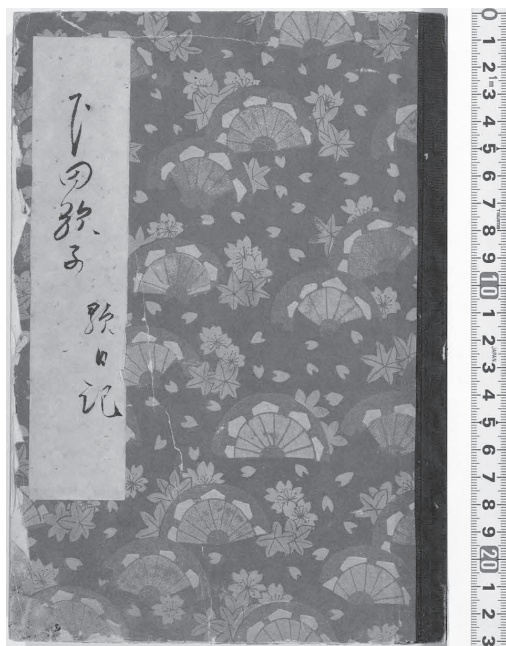
究員

53番の短歌、五句目の「なりし窓かな」は、『竹の若葉』では「なりし宿かな」とあり、「窓」は「宿」と書かれている。この短歌の三句目に「見し窓の」とあり、「窓」が同じ短歌の中で重複して出てくるのは不自然で、「宿」を「窓」と誤って書いたものである。175番の短歌、四句目に「ひきく處や」の「ひきく」は、『竹の若葉』では「低き處」とある。平仮名で「ひくき」とするところを誤って「ひきく」と書いたものである。419番の短歌、三句目の「も、ち島」は、『雪の下草』では「も、ち鳥」となっている。字体が似ているので、「鳥」を誤って「島」と書いたものである。いずれも歌会の草稿から転記する際に誤写したものと判断される。

本文中の「み、ずの歌」(図版31—44 和歌番号206—288)と「大正九年四月廿五日信州北佐久郡平根村……」(図版45—49 和歌番号298—316)の二編の紀行文は「香雪叢書」第一巻『紀行随筆 よもぎむぐら』に収載されている。「大正九年四月廿五日信州北佐久郡平根村……」は、「花吹雪」と題を付けられている。『歌日記』の内容、二編の紀行文などについては別稿で考察したい。

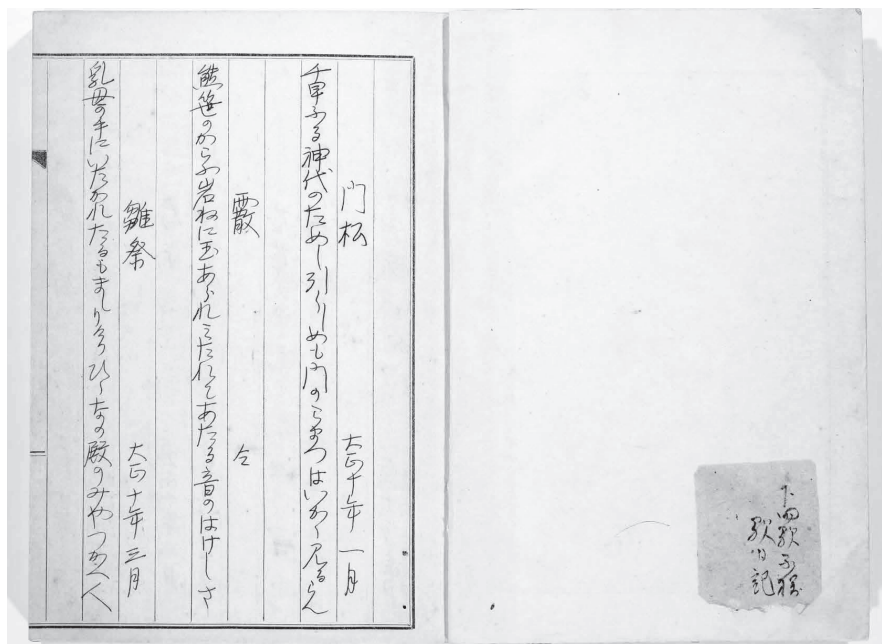
(おおい みよこ・実践女子大学文芸資料研究所客員研

『下田歌子 歌日記』影印



表紙

1



表紙裏

2

春日局

大の十年三月

春日山みかどにたつむかみなるはら君いあて大いああ(き)

春雨

大の十年二月

門きてちとらた(て春雨のひと日はあまらううて)二な

若草

全

庭草の根をたぐりおちたらもかうて情(もあま)春人は

山吹

大の十年四月

黄金のつにさきほらうても山吹の雲をとめあや(ん)たらうん

蝶

全

蝶みかどにみかどさきよりをなう(こ)うう魂はあや(ん)たらうん

野遊

大の十年五月

いよの遊ふかた遊うつらにわか花かたみあき忘れ(ん)

山水

全

世のうん直もあめぬ山のみのうらうらは海から(き)

新竹

大の十年六月

子は親に(ん)申と見ゆれどわかれのなれは同じわけはあうて

採苗

全

若苗にはえて美(い)早くあめあか紐たすきまうすあ(き)

夏月

大の十年七月

吾姉子の自地(う)ゆわたあやあやうきいろ情(もあま)夕月(ゆ)

瀧

全

腰をすき岩かぬゆすりおちたう(ん)情(もあま)ひきぬ神(かみ)をたけ(ん)

扇

大の十年八月

牛束(う)もみだぬは(ん)のさし扇(あふ)な(ん)う神(かみ)もやうかぬ(ん)

蚊遣人

全

蚊遣(か)る(ん)か(ん)う(ん)う(ん)に(ん)あた(ん)わ(ん)ひ(ん)の(ん)煙(け)は(ん)い(ん)せ(ん)か(ん)う(ん)

秋窓夜雨

大の十年九月

燈火(あ)を(ん)と(ん)かけ(ん)て(ん)秋(あ)の(ん)程(ほど)の(ん)ま(ん)う(ん)雨(あ)は(ん)いつ(ん)か(ん)ま(ん)う(ん)き



山歌人稀

大正十年九月

われは門ひく見もあつてこそさうし山のたひもあつれ

海迎霧

大正十年十月

秋雲のあつてつゝわたるはあつてみよは果なりあつ

遠村燈

左

木がけの青山は名物のさるる大影にあけけさる

秋里

大正十年十月

山柳をひくつ店もあるをなほわけす岡への里

秋山

左

名がけの木の葉のうき耳たぬ鳥の音さるる秋の山路

秋懷旧

左

天目のかつたれ（申あ）秋はあつてさのと知ろぬる

楠公

左

生かす死牛のたての血なすゝ（さ）雲井のほとけさる

5

木枯

大正十年二月

夕影のたむく野とわがりのあわたしはさるるあつ

神樂

左

かみ秋雲さるるさるは神さるるにます心地

新年

大正十年一月

直とわがねはふね年ほさるるのひともあたるさる

浦鶴

左

たかものうら安しとわがねさるるにさるるのさるる

霞

大正十年二月

冬枯の相も霞の遠山もかすみさるるのとなつる

管

左

雪折の木の根岸のうらみはせ籠の春をわがせとわなく

春山

大正十年三月

むらさきの霞のさにつくまてのとわがねさるる春の山れあ

6

苗代

大正十年三月

萬葉(き改め)十町田のあせ道なわいりけきりあなは

梨花

大正十一年四月

夢八(まなは)まなはやりと燕(つばき)のみその軒(のり)の花散る

帰丁

大正十年四月

樺太のほそほひつちうしせま丁はつち帰(かへ)りゆらん

落花

大正十年五月

きぬきのうと乱(らん)れとちる花(はな)吹雪(ふきゆき)も重(おも)し雨(あめ)やあきらん

怒涛

全

いぢき(いぢき)のうらにふれは荒磯(あらいそ)波(なみ)は高(たか)しうらち

夕顔

大正十年五月

いぢき(いぢき)ななもあはす夕顔(ゆがな)の花(はな)をあはれと植(う)えてこそみれ

水鶏

全

いぢき(いぢき)花(はな)をえと月(つき)をきり磯(いそ)川の岸(きし)に水鶏(みづけい)をう

7

夏船遊

大正十年七月

なわれ来るふな歌(うた)ゆへにむきりなつ川(がわ)に梅(うめ)やとらう

夏羈旅

全

あすかき海(うみ)き宿(しゆく)をこけけり夏(なつ)をきり来(き)り旅(りょ)終(は)つて

夏富士

大正十年八月

程(ほど)とあそぶを破(やぶ)る人のあそぶを破(やぶ)る人の口(くち)ふひくら

海上雲

全

はなはれ今(いま)かも吹(ふ)かぬ雲(うみ)の岸(きし)つちを傷(や)め大和(だいわ)田(で)の原(はら)

飛行機

大正十年九月

いぢき(いぢき)高(たか)くもたれ翅(はね)なき人(ひと)空(そら)をとせなうや

静女

全

あはれ世(よ)うの花(はな)重(おも)みよの雲(うみ)やうもたれ被(おほ)き他(ほか)ひん

社頭杉

大正十年十月

いぢき(いぢき)たけひなれもほこ杉(すぎ)を疎(そ)くすこし山(やま)つみろ宮(みや)

8

古寺菊

大の十一年十月

法師よりすしらりあお棚の菊の香興し秋のやみ寺

女捨て埋道

大の十一年十月

女捨て埋道なるは雲とけり垣根の道はゆめれさあし

暮秋述懷

乞

元結子あけつ雲とけりわびとみし秋もむめなうらう

女捨て

乞

わが岡の権ひらふきよ紅葉のちうしくけはさきと申かた

暮秋

乞

かきふみ秋はさきと申かたさきと申かたさきと申かた

山房庵

大の十一年十月

一からふ木煙石炭のときせもさあゆめすて

冬祝

乞

さき草の花はあけつ木も事さきと申かたさきと申かた

9

鈴電

大の十一年十一月

鈴電とは雲とあけつて一層のあけつてさきと申かた

水島

乞

水島に川うめたてりて水島のうめたてりて遠きあけつ

早春

大の十一年二月

ちうお根はまた雲とあけつて木の花は春とあけつて

若葉

乞

ちうお根はまた雲とあけつて木の花は春とあけつて

經費節約

乞

ちうお根はまた雲とあけつて木の花は春とあけつて

神功皇后

乞

ちうお根はまた雲とあけつて木の花は春とあけつて

春旅

大の十一年三月

ちうお根はまた雲とあけつて木の花は春とあけつて

10



猫

大の二十三年三月

おれれわが半の猫は老たへとくるは外はよく用をいそ

山家花

大の二十三年四月

山家の花の便りはおきあらしもとほすやうぬ(きり即)

田家花

左

鈴すく(何に柳)いそふは女の家さう惜(や)はあふぬ

養蠶機

大の二十三年五月

花々掃(こ)ふの夢もあぬやうかおはすゆを(り)をめたり

釣魚

左

釣りあげ魚をとれ舟(き)く岸の柳のいとをわすれて

池蓮

大の二十三年七月

白蓮のひさしくをあら(て)きま(さ)るる池のはちす事あ

繪扇

左

大木常(や)木常の葉のひき原(つ)くま(と)かたち(つ)く(ん)

11

夏衣

大の二十三年八月

色あせ(柳)まの裏をとき(さ)る(き)たる衣も夏はたつらん

夏枕

左

更(き)な(れ)あ(き)ね(す)る水盛(り)かほの枕もぬまはあ(う)に

あ上月

大の二十三年九月

里(り)より低(ひ)くち(き)る太(た)ねのほ(ほ)ら(ら)なく月(づ)を(つ)は(は)る

閑窓雨

左

焼(や)れ(つ)る氏草(うぢくさ)の上(うへ)を思(おも)ふ程(ほど)のま(ま)う雨(あめ)はあ(あ)る(る)る

秋夜讀書

大の二十三年十月

ふ(き)を(き)手(て)取(と)らね(は)わ(わ)り燈(あ)かりた(た)む(む)る(る)秋(あき)の(の)ち(ち)わ(わ)

涼義家

左

菊(き)み(み)つ(つ)さ(さ)の神(かみ)と(と)つ(つ)き(き)り(り)ふ(ふ)を(を)ち(ち)か(か)ふ(ふ)ち(ち)う(う)る(る)

葛江事

左

あり山(やま)松(まつ)ま(ま)の(の)ち(ち)ら(ら)秋(あき)の(の)ち(ち)わ(わ)り(り)残(のこ)り(る)ん

12

草符

大の十三年二月

あまのちのたき果てあえたるさひらやき 若こひも

爐辺南談

大の十三年二月

仮かたにあり用き故郷のやまのなむかたういふらん

除ね鐘

え

うとき車もわたわけらつてのちの始のちうを つる鐘の音

若水

大の十三年一月

道の為むすあゝあゝのわが水さると 恨は数へさらちん

山燈

え

大なる低くなぬとくはつとけきさひぬ雪うのね

垂柳誰家

大の十三年二月

膝へくさる中道古柳のやまはつ門は誰かをなさん

帝都復興

え

都へつる花はさきたちてやとまたとて園のまはり

13

門柳

大の十三年二月

つらりのけきらんと青柳のち枝みしかくたれる門のな

春都

え

やけ残るなみ木つさくらさくえんはさるはなを都ちのち

政郷春月

大の十三年三月

故郷の花のあやもさる世はさるやむかの月もさる

春雨狂静

え

花はみみよりさるさる更なる春の雨さく窓のつけ

春朝

大の十三年四月

大なる花の眠りさぬ夜の寝るあてうたふあやたれ

春駒

え

まきのちかむちに勇みたる草のまはも駒はなつまううう

撫路蹴踏

大の十三年五月

さつゝかた枝は花をなうにうさるう一つにみれな

14

寄硯述懷

大正十三年五月

吾の爲はさすなき玉にまじりてうつる硯くほみちれども

渡頭子規

大正十三年二月

渡舟樟のついで雨のそとあつて雲井になくほととぎす

山百合

金

あり雲の疑うをたぐふ岩のねに白く浮きいそぐ白百合

窓前虫

大正十三年七月

はなちやりしから雲のあり来てまじりて机よれとつとむる

夏人事

金

此の夏はよく陽あつておほきううすうらめしき事なせよ

電

大正十三年八月

いさみの影の生きたる白玉は雨のそとめし霞のうらけ

犬

金

花をのぞかす犬の子にむねと尾振つて伏せはええぞ  
井たね

草庵の虫をすく

大正十三年九月

短くすくなく虫の音を枕をてゆめも露けき草の庵のな

桶の行集内侍をすふた

金

花をふんはふせきを吉龍山のさぬ袖の香えたかたれ

廿粒露

金

雨寒き秋の吉野の萩葉にゆきえは花をこぼる

野虫

金

いつよりかけはつとすくひて一羽は虫のねをふね草むらなし

曉霧

大正十三年十月

短を残りさうのまをひをてまじりてまた掃過ぬ明くれつと

月夜訪友

金

契りも道ぬちから月短く短くと友の待たすやある

漁村持衣

大正十三年十一月

ちやをせなむみち短の雨をいそいで事もぬらうら



張良

大正十三年二月

さけつるもの皆のあとをせむかれぬらんや

遠村持成

左

遠きぬたをり一風の傳きよあきは山の里むかし

靴

左

はかりをききあみし靴あか太富の上のぼろめ

板屋敷

大正十三年十一月

はひやわたさるめやの板ひき一敷たけの音のさやけ

冬田あ

左

多ひもの水月氷閉ちやう山田のさともしつしき

社頭新平

大正十四年一月

秋あとのふもとを成神まうれく老もさけつるや即

寒松

左

はひつるもの葉けきを栞みさむけをちしぬのまつな

17

梅の花さきたる宿る客人あり大正十四年三月

うらわらうらみも月ほとけけり梅さあなるやをこほれ

孟母

左

君事つきのころもけきつひろきわあはなみける

寫前栞

左

月あたる雪を寒き世寫し梅の匂ひにひらく

母

左

春のしも動あすあはゆりかきゆる母のちの力なり

名所春曙

大正十四年三月

一たひはゆきえそめ梅さよのうさう春のあけは

土筆

左

花を多をいすむしにしくしたけぬる春はちやうか

雨中栞

大正十四年四月

雨や栞の花さきぬかたうけをゆめのをまほあや

18

月経蛙

大の十四年四月

月の事もあらずとあるは蛙の音に似てなるなり

若衆

大の四年五月

川より流るる花を看まてすききと點よりみわし

叙

を

花を枝に枝にわたりてさきわくさわくさなりなり

新樹

大の十四年五月

世の人の心もかや否もきみなりともいふをわくさく

江草

を

早稲の岸にせまうと痛たりあるはせはくさなるにけり

水檻

大の十四年七月

みよきと水檻の水の音きはなぬ月もすしかりなり

塵

を

たかにもちさはななりとちりちりともわたりて都人あはれ

松古納保

大の十四年八月

さらば松古納保しつわねのまつかきしめて独りすまむ

牛

を

乗れどもかひく南のねをきつてうしは帰さるゝあかき

垣野歌

大の十四年九月

かりある結びまねをきくはあなけさく鯉魚の死

秋風入扉

を

板(事)また音とまききくすはれ吹きす秋の初風

深程下

大の十四年十月

者の方の床宛の夜もなかりねと人はうらめしきなり

秋眺望

を

かき破る尾宛の夜は秋さうのあつて悔まふもなかり

上杉謙信

大の十四年十一月

仇敵のたぐひ風の音はなかりはなかりなり



貧窮

大正十四年二月

あせりくくふぬわかにさうなきひさうのうはるる心も

老人

左

あまのうきはの秋はぬけのせんさうの秋はやらぬさ

森杉

左

月をえぬ神やまると拜いつかりめうきはえ森杉

行路霜

大正十四年十二月

市人かたむすむる声きえておどろき都やちやう

星

左

ききつゝ信はまきとわんやままたくははははは

晴電

大正十五年一月

限りなくさうのゆきは大雪ふりて降れたるあはな

笑門福来

左

さき草のほひぬいつり仰きみも同じに秋もそみこぼれた

21

柳の月霞あり

大正十五年二月

園のなまきとはみえて中庭の柳の眠るおぼろの月

深谷野

左

つゝ思ひなりわくふく矢のみおもひ舞はれゆく

春月眺

左

音傳ふお袖をのすあてちる花のゆくもわがすかす秋の月

弓

左

みづのにははるるさすなうぬも風のすかりと残れき

月経路花影

大正十五年三月

さき花の雪はたちき人影はさうこちわん 風程の月

行舟夜已深

左

わが船はるるあついつりく船のた影はきし更夜中の月

光

大正十五年四月

心を照らす玉の光はあかりにつくみえは貴とあらわれ

22

音

大の十五年四月

鈴つにもわが耳鳴りの高きればなりと言ひて死する

春社

大の十五年五月

み社の死見をうにまうて来る人を神はゆきますと神

春寺

左

あ師の文を声も眠けはこひりつわさる春の山寺

運動会

大の十五年六月

うぬ敷たぢまの神もろくゑは動くは人のこゝろなりと

勤勉

左

何物ひくはるきも世をちたつては神はちたつてあは

更衣

左

白妙の衣中寒くはあはたぬき袷を重ねるや着る

田取草取り

左

にえわる水田のはるさるつきの山煙にくうとわ

夏雲

大の十五年七月

雲の峰うこくもみえぬうなわの待り雨はあはれ

夏水

左

夏木立われば遠山名も水の音近くゆえなかに

夕立のたつ

大の十五年八月

夕立の雨のちたつた月にならぬ個にすもあつち

網打

左

引きあふ網重けにも足重もあなまふやうし裏やめりし

山家初秋

大の十五年九月

うせみのかは秋なれや鈴井の衣中さあいの下庵

まじり

左

鬼神もあきんすれはまじりのひらたきまじり

秋声在牛

左

吹風の音もあきんすれはまじりのひらたきまじり

諸葛孔明

大の十二廿九日

秋寒き枯花の宇を星おちてはとやみとなつてふらふ

風送菊香

大の十二廿十日

雲がけの山麓もさるるみそ菊の香さむ 膳するは

雨中紅葉

を

ちんちん時雨のあめは先づ水と並木の紅葉をさやめたり

要入

大の十二廿十日

あふるる大野の白く乱れさもつちぬえは雲なるら

竹箱

を

ふれ紅葉あふるの箱のうたひはぬえぬえのひそをえり

寒夜

大の十二廿二日

園の中の秋の水も氷をむくせと目 ぬえぬえの音をさる

雪を校

を

火ほしやすきあふる人並み屋のかたきとあかひともすな

新年日

昭和三年一月

軽く日用 走りていそやみありし年といふとき

巖

を

英鉄歌のわた中よりこぼたり 不巖はす 貴

春雪

昭和三年二月

深かぬ春の泡雪わ草のままだにさなけけさうれ

少女

を

直ほすれ清かれの女をれは神の心をさるる

春宵聞琴

昭和三年三月

まゝらぬ歳は短の夢の音はわかれをみそさうく ありけり

渾身物語 桐壺の巻

を

桐ほす 素の秋は宮城のこききの露もさるれをあらん

遠

昭和三年四月

うちをぬえ人の心はたりは外国よりも遠くをあらん



3斤.

昭和二年四月

天なる神のみまの誠あるひと爲るは  
——是なり

花吹雪

昭和五年五月

かきたけ里娘の上とちる花の吹雪よりきり夢の手枕

山  
躑  
躑

气

岩をたけち低く候きしめてしはかきえりぬる

行路  
草

昭和不平  
六月

隱士出山

合

上方は背長にある一畝草のひきくまやかとのかどひ路

うらやまはなすぬらし  
山かけの竹むらか  
れ住む人のあき

耳後へあもぢやあま水にらなきせまいつくすまら

桃

大正十年三月

あめ牛の乳しほるとく子の黒髪、上は桃の花ちる

雲雀

高十年三月

雲霧みな空をあらと見引のやわたの春を昼静かあり

庸

大正十年九月

はやり男の鏡と云ふをみおのり唐の唐より山とくかたを

薄

今

後、命  
おら、薄き垣を  
あまうと秋をまねく庭うな

春日山行

嘉平二年三月

葛公

气

春やすの木の下のひをうしうさうちひで、明日また来。

君が半の國の大綱ひきうてまうう船もとあかりさむ

葛

大正十一年九月

かけ書き、その真意らうにたうとみはひのれきめん

竹

气

ちひ 園は外のはちひまふちひふちひあす



休田院、北目川院、大蛇殿下の經井はち

成らせ終るほどとあるは、わあたること、かゝまつたなる

うちかふともはれ、はなれ、山、今、當、は、さ、月、を、え、る、う、り、

あひ知る人の招きさうて ちの五年

信濃、か、の、け、る、な、う、に

に、集、の、を、は、ま、た、さ、う、す、ひ、た、け、秋、の、す、め、た、は、霧、を、え、ん、せ、け、る

月、い、な、う、依、田、社、に、て

さ、な、き、う、ほ、る、油、と、汲、み、見、化、は、お、も、ち、る、人、を、や、う、さ、う

明倫和歌集に謹解、か、う、す、と、て

烈、か、わ、み、と、う、ら、ひ、の、ほ、と、思、ひ、て

人、の、申、道、う、み、を、言、ふ、事、も、や、う、と、錦、の、色、は、け、え、け、る

ちの五年

鹿、の、考、え、ら、う、な、牛、の、千、代、の、数、を、あ、け、を、え、る、に、も

め、の、ゆ、に、生、ひ、度、ら、う、な、牛、も、ち、の、松、を、は、ゆ、る、か、う、ら、ん

み、く、す、の、う、た

ちの五年八月

ちの五年八月廿五日、午前七時、世々

とつた、年、事、都、と、突、て、に、相、相、仙、仙、あ

なる、仙、鶴、社、に、も、す

星、も、お、我、道、の、た、め、思、ひ、つ、る、や、ま、ち、と、さ、う、の、隔、せ、し、も、な

今日、の、云、え、豫、報、要、い、と、な、ん、わ、び、

その、直、の、博、士、に、と、は、今、日、も、た、た、雲、り、と、雨、に、な、ん、と、を、い、ふ

揉、ほ、あ、た、ら、う、う、雪、が、ひ、き、く、と、あ、て

日、の、光、り、さ、う、申

雨、さ、と、し、り、空、を、田、に、に、た、か、う、も、さ、を、候、あ、う、れ

ら、あ、た、う、畑、は、西、瓜、あ、ま、た

あ、ら、ひ、た、り

民、草、や、直、ほ、な、う、瓜、畑、畠、白、飯、を、一、跡、も、み、え、ね、は

桃、畑、の、み、申、に

桃、林、実、も、あ、き、枝、に、紙、袋、や、け、と、残、が、あ、げ、れ、な、る、の、な

秋、圃、紙、な、市、長、の、お、も、せ、た、ら、う

や、ち、ま、だ、の、道、の、あ、く、田、の、ま、ち、も、ひ、ら、あ、て、わ、れ、わ、け、う、あ、さ、



國府寺をあらうける所

つみける雲の影にふたりの山もふれそたり

電車よりちりり

たちこみく(のまれのた)かたきあきあきこころ地せう

山路をわたりて

ふもとや夏は残りしふけのほろみやまの杉は清 かなう

藤をきりきりしければ常陸のたふのぼり

たういぬの目うまを物なり潤めりんたる

金監光るのあかしに(山麓はまよひなる)

旗改らむ(すて信丹きりる山麓はまよひなる)

一 莊を仙鶴とまけり

お鶴の千代の名にあかみくるまの駐まりまゝ一あきあき

(さるはなを始めてる仙名留まき官のは鶴ひ所)

あきと鶴とせつ(れはなう)

仙(の佐あきと鶴の石すまのゆまかぬ)直もろくに空あん

仙(のさかひの鶴の地はまのつてあまのあのかつ)こえはや

らう莊は吉本園城の早くよう何れりん

らひされたり(かやう)藤城(うまに)

いたはる事あらこえはえまき事れ

なりけれは

かゝるにとはあらしむ高のまのあ(す)むかふ藤城

次日は所に橋ある地はなれば月夜(うまに)

(さるお鶴とひえの)山麓はまよひなる

ひにし(みたりし)らうたらとあきさの鶴

あきさのす(まの)これは鶴(は)とあは(まの)

まのにせせと(つて)ひに(まの)と待たれ

待(こ)こ(まの)鶴の地(まの)と(まの)のあまき(まの)

字(まの)と(まの)原(まの)と(まの)

機城(まの)のあ(まの)鳴(まの)砂(まの)は(まの)た(まの)

(まの)鶴(まの)のあ(まの)う(まの)

花(まの)のあ(まの)は(まの)て(まの)も(まの)鶴(まの)のあ(まの)

花(まの)のあ(まの)は(まの)て(まの)も(まの)鶴(まの)のあ(まの)





くまにみたるされ秋

庭のきりひこえなれきり(まにたすけり)つづのぼるぼる

あさの湖上にて思ふ事を

巨匠はまほおちあけしゆり舟のはやも道をすめりつな

釣すといふ

寄りと来ぬ鳥につらねとくめたるあつ湖面上みはるに

人などそのわこふ像をうけ

つらねり鳥にのりもたききかへつるきりかへる

小川ありる馬あてはれたるに

るきりいづつ小川のきりかへるは胸よりきり

焼子とふ所を臥すといふ

あまき焼子の名をえかきたる病めるをよせ残し置くといふ

心地留まりといふ花よすまはるあつふかきとあつ

と留まるといふ事あつち中をうけはすは留りつる

大徳寺のうへ

湯きのほろ湯の音傳す(まやう)几なまうそこの老かど

大徳寺のうへを流りしきり極楽寺のうへに集りてやたれ

かきりかきりかきりかきりかきりかきりかきりかきり

なり(れは)蓮は似たる香のうへ香月さかあつ

何れとれは標榜なりさば(きり)ぬ香のうへ

といふは(れは)これなりさば(きり)ぬ香のうへ

といふは(れは)これなりさば(きり)ぬ香のうへ

まはるのうへにたる湯をきりて(きり)ぬ

まはるのうへにたる湯をきりて(きり)ぬ

まはるのうへにたる湯をきりて(きり)ぬ

まはるのうへ

まはるのうへにたる湯をきりて(きり)ぬ

まはるのうへ

まはるのうへにたる湯をきりて(きり)ぬ



人々あつたては掃きつゝ

弄きてあそびてあつたては掃きつゝ

のほろりとした

あつたては掃きつゝ

仰ぎてあつたては掃きつゝ

あつた

山裾や腰のあたりは掃きつゝ

心をとらへられしあつたては掃きつゝ

富士の裾や腰のあたりは掃きつゝ

今日とて帰途につく

見えたあつたては掃きつゝ

平家の子やあつたては掃きつゝ

あつたては掃きつゝ

これとあつたては掃きつゝ

至極とて草葉のす

あつたては掃きつゝ

あつた

あつたては掃きつゝ

あつたては掃きつゝ

あつた

あつたては掃きつゝ

あつた

あつたては掃きつゝ

あつたては掃きつゝ

あつた

あつたては掃きつゝ

あつた

あつたては掃きつゝ

あつた

あつたては掃きつゝ

あつたては掃きつゝ





己未の元旦に

仰きえり峰のぼるや下や草のあゆみ おんいも

大正八年七月十八日

副任者青木文彦卿が根を切る新

佐々木村の宝塚を築き勸功やつひの形見をうん

空輝のわは海神にもく雲のたまはとくあまのつよ

大正九年四月廿六日信州北村郡平松村字  
平尾なる字芳茂主岡中氏の清人にうへ

そこの世と事とあつたつをはるか世家の

中興の祖平尾家の古戦跡其のあたりにある

うけわねを傳へて守り道する事なか

かきつたあまはあひひの知るす せんを

こたひ岡中氏があめみひのうへて遠祖

源経基を銘記するついでに記されたる系譜

をいふことを得てはこそなき幸ひなり

すけはる低も貴く遠つ祖のあひひのあまの

あひひのあまのあひひのあまのあひひの

あひひのあまのあひひのあまのあひひの

曉陽く行装きたる程雲暗く重なる

雨も降り落ちぬき雲色なるに

心先はく旅臥る宿屋のなとわはかりてうまする人

午前七時廿分といふに上野駅を發車す

大宮駅を過ぎてより宿屋軒く披け

微風拂るに起り日の光仄あや初めたり

勇みたりや天の如く人雪うちひき日影かりぬ

鈴葉畑養生につく所の雪をしら帆をくちし岸にみ

うーを花の咲き寒くあやをけり遠方のみね

花の咲き寒くあやをけり遠方のみね

花の咲き寒くあやをけり遠方のみね

花の咲き寒くあやをけり遠方のみね

花の咲き寒くあやをけり遠方のみね

花の咲き寒くあやをけり遠方のみね

花の咲き寒くあやをけり遠方のみね

花の咲き寒くあやをけり遠方のみね

花の咲き寒くあやをけり遠方のみね

花の咲き寒くあやをけり遠方のみね





晝寝を以てたゞし少睡の事持もたらず  
 清徳を以て帰還の事なる 岡田氏おは  
 くらに別る  
 怪井氏の如きは 慶の積の事一すぢき  
 もまゝ 其葉の如きは 慶はにきものか 懐き可な  
 破印もはなす 程にききききききの中は  
 兵士餘多見え 万歳の声なるか こと  
 起るぬ  
 持る人勝の神の哉みつきき こときききききき  
 何の中よりか 前途を祝福 ことききき

かぢにけき別れり こときは ことききき  
 ことききききききききききききききき  
 ことききききききききききききききき  
 ことききききききききききききききき

故劉様青木又造主か 一周年のみききき  
 ことききききききききききききききき  
 ことききききききききききききききき  
 ことききききききききききききききき

大正五年の秋 日足に遠旦せ (連) (離)  
 ことききききききききききききききき  
 ことききききききききききききききき  
 ことききききききききききききききき

寄 嚴祝

大正五年八月 ことききき

寄 道祝

秋の道祝ひるに 目の如き ことききき  
 ことききききききききききききききき

年々 ことききき  
 ことききききききききききききききき

秋の道祝ひるに 目の如き ことききき  
 ことききききききききききききききき

秋の道祝ひるに 目の如き ことききき  
 ことききききききききききききききき

秋の道祝ひるに 目の如き ことききき  
 ことききききききききききききききき

秋の道祝ひるに 目の如き ことききき  
 ことききききききききききききききき

うきを辞めてまへ年野接ぎ茂成の  
 けにちと云ひぬのけと云ふは佳例の  
 証を目にせぬやいひ加(こと云はる、  
 されき)もつちかぬてちか たるすゆふ八  
 寄又祝といふものをかめる。  
 わわたわのいとおきよりみき(て接ぎすはもと更なりぬる  
 けかぬ道の愛よりいふて)ちかぬてことほ  
 かしきる

何れか

接ぎ金はまだあやうきかむいけ 老もぬけ  
 人より贈られぬいふは接ぎ金ふするこそ  
 接ぎ金は第すむたぬ人接ぎぬ人の接をすするこそ  
 古師の賀々道々開くわも接ぎ金  
 廿四日の御ちかれは寄接祝といふ  
 こととすめ。  
 大のすき年十月  
 まつるをすするこそ接ぎ金ふするこそ  
 ち(るか接ぎ金とすむすは接ぎ金ふするこそ  
 みれは接ぎ

希 輝  
 昭和三十二年八月  
 うきなる森のこゝろは輝ぬるあやうき(かみきかな  
 温泉  
 気なきくまの湯あまの底にひたるは月と云ふこと  
 博 風  
 昭和三十二年九月  
 吹きかき風の心を見ゆるあやうき尾花うきうき  
 夕月  
 全

酔ひをや一葉の秋をほのかもつゆをんせたる夕月のわけ  
 秋 霜  
 昭和三十二年十月  
 背に出る軍指田のるきもくまぬ初霞き秋の山ぞと  
 汽車  
 全  
 調のほをぬけつくり行く汽車のなみもくまぬ初霞き秋の山ぞと  
 双思樹のけに  
 昭和三十二年十月  
 雲にならぬ秋の心 頼みきとめてまた春霞きことと事つた





安  
氣

昭和三年三月

はる

合

とめね

令

胡氏

合

さきほろろ礼を乞ふ  
心せよ  
あめが神の  
風

昭和二年

横切る片々林は雨のはるあきけなきすなく

气

心もあやまちなく  
日もありん

永如家

昭和三年五月

是物は  
 申きの大  
 情田もさ  
 多  
 9  
 縁の  
 思の  
 色を  
 ほのめく

气

子規なうやうと窓押せは軒の橋かきなをゆる

帚木の巻 (浮城物語)  
昭和二年六月

桐つほの雨の粒はよりさきよりあふ露も

12

中宮は御申上人の月かゆのやうなはかれ

夕白子一甲

合

五月廿九日

とちあひと

 $\frac{1}{2}$ 

名をいふに  
むとう即  
かにけ  
たる牙も拾  
て

23 垣の夕日

昭和三年七月

本記事は音女奴に昌木とある月影のゆゑと  
ある

あき

蘭

昭和三年七月

いせをわひ だうあは睦しをい 姉かあふこ

わゆこりうせ

美し

昭和三年八月

舞扇さすにゆき玉たけつひか梨こぼる

月の夜

醜し

左

いしーいんきうのは買債して飾る指輪の

また白 11月

月狂鹿

昭和三年九月

今宵またあはひわひける人 三たき鹿の月 2月

左

風前雲

左

ほろの梅まつむ ちの雲やきあすやまの

古戦場 (三橋)

昭和三年十月

鬼哭咄々川 零く 陳大明滅月暗

せき腹 武士わ

いは仇 神の土塊と 代て年ある女戦場

あせり 木の芽やみ

寝なすやく ねすき

孔夫子 (三橋)

昭和三年十月

ふんを仰けはやき 夫子が牆は九段ちう

誰かはる牆内の 二つうの角さうわけ人

格にのりて流るを 目にみぬ力あらえて

わぬ目のちうみ教の 道の走りとわきわ

仰けはきける徳

軍人

左

軍人 (三橋) にみわやまをちかきぬに治るせうあけい

書箱

左

昔今何の内外もいとしとひろきはなのはや

帽箱

昭和三年十月

老を治仰くみのの雲さといくちうの晴

木の枝

栗

左

いそきかとおほふ栗の奥もあめをえき

はくがす

寒雨

昭和三年十月





薔薇

昭和四年六月

水をはきく二ほど三つうすくわいて

右きくわ

豊太肉

右

中村のお軒端のちういさよをおぼくきかきと

やはえし

麦

右

はつ輝のちのちういさよおぼくきかきと

瓢

右

あひまあひと睡かふとなひさきき

かき

瓜

昭和四年七月

姫瓜に目なううと落ちの神々みし昔のけ

瓜はあき西のうたうと焼くわぬき

かき

紙

右

うとあきつりも紙はあききき

かき

物かきとえたるなうぬききいふ月かき紙

かき

紙きり

昭和四年八月

第り氷のきりきりきりきりきりきりきり

かき

燭影梅水

右

木のうの流き影は落ちなうだちとわのけぬき

かき

昭和四年九月

雨うい風きききききききききききききき

かき

けり(のきききききききききききききき)

かき

蠶虫

右

うわあきききききききききききききき

かき

けり(のきききききききききききききき)

鈴

昭和四年十月

物かきとえたるなうぬきききききききき





鏡餅

昭和五年一月

いさひ櫃へもをさるせもなわちてこま

鏡餅うな

雪印梅

を

梅の花も申す、一様ぢやいね雪ふりか

阿上西辰

昭和五年二月

目の前の海は島もち島ひるまにうさ春の

世の海の水のさうゆもあらわまたねとすみ

紀元節

を

とみ山のゆきもたすまのさきと氏をまつや

けめ

はつをいさく佳日けあめは神のまなやと

吾氏

田家妻西

昭和五年三月

なう雲花まつ次の春雨はねたあけのあ田うら

拾見

を

拾ひあふを子うにさるあけとさる四の世

あつては

岸山吹

昭和五年四月

岸の岸山吹の岸、さき花はちんぎん

駒あて水はあをさるせんぎの山吹さき

開盤

を

あたりき店みえてお盤の功あまはるの山吹

にひけの煙すさあは花さかあのをさふひ

さあ

梅実

昭和五年五月

心せふらあ拾ひて食うやせんを梅

梅実

水鷄

を

けりけり水鷄、押さるるあきあき光は梅

しも

田植

昭和五年六月

黄はあるせと梅のまよ

真白半城、市たす

早苗さう、後水と

まゝの助たすけ

もふ年は辰はふふふふふ  
 心けはきく女夫つれ  
 院の袖をつつけりて  
 つま都念の姉妹は  
 藤たふうぬあつうう  
 昭和五年六月  
 鯉織  
 藤根の蔓はふふふふ  
 ちうらふふ 慶ひを  
 つまらふふふ 相もち  
 うかたを集ふ友をふひ  
 龍の門ぬくさうさき  
 夜ふ新端の鯉うけ  
 田植  
 背かひき 露のまふふ姉ふかとうふふふに花  
 昭和五年六月

岡のふふふふふふふ  
 昭和五年七月  
 天の川  
 天の川はふふふふふふ  
 昭和五年七月  
 湖のふふふふふふ  
 昭和五年七月  
 湖上ふふ  
 昭和五年七月

花火  
 昭和五年八月  
 うちのふふふふふふ  
 昭和五年九月  
 早秋  
 昭和五年九月  
 孝  
 昭和五年九月

道とふふふふふふ  
 昭和五年十月  
 西行法師  
 昭和五年十月  
 孝  
 昭和五年十月



厄

昭和五年十月

自然のちうへんたる井のちうへんあかむ屋のちうへんたる

大桶

昭和五年十一月

若きときやう大桶のちうへんあかむ屋のちうへんたる

猿

を

鶴のまじりかする池のちうへんあかむ屋のちうへんたる

鴨

昭和五年十一月

柿

を

ひたきなく玉のかんきつ柿のちうへんあかむ屋のちうへんたる

松樹

昭和五年十一月

筑前かりんをみる(一)柿の老をみる

鶏

を

昭和五年十一月あかむ屋のちうへんあかむ屋のちうへんたる

松樹

昭和六年一月

おぼろき老柿のちうへんあかむ屋のちうへんたる

鶏

を

中増のちうへんあかむ屋のちうへんたる

雨中

昭和六年二月

まじりかする池のちうへんあかむ屋のちうへんたる

鹿

を

わが鹿を助の場末にあらうと静かなれども

曲水

昭和六年三月

永きものちうへんあかむ屋のちうへんたる

農村

を

荒れぬ民草のちうへんあかむ屋のちうへんたる

あかむ屋のちうへんあかむ屋のちうへんたる

あかむ屋のちうへんあかむ屋のちうへんたる

曲水宴

昭和六年三月

たけなももの庭にたけなもを置きて花をえさる

桃花村

を

垣の外のさくらも花をえさる

あかへくさきうちを花なくを桃さく村を

新

を

うらぬのひらう あかへくさきうちを桃さく村を

あかへくさきうちを花なくを桃さく村を

故郷の花

昭和六年四月

あかへくさきうちを花なくを桃さく村を

新

を

あかへくさきうちを花なくを桃さく村を

あかへくさきうちを花なくを桃さく村を

名所子規

昭和六年五月

はあきの月をうらなほくさきうちを桃さく村を

つば

を

湯のたけの雨はちかたつさうあかへくさきうちを桃さく村を

甘綿電報

昭和六年六月

あかへくさきうちを花なくを桃さく村を

あかへくさきうちを花なくを桃さく村を

湯氏物語 甘綿の巻

を

あかへくさきうちを花なくを桃さく村を

あかへくさきうちを花なくを桃さく村を

甘綿

昭和六年六月

あかへくさきうちを花なくを桃さく村を

便

を

あかへくさきうちを花なくを桃さく村を

千蘭盆舎

昭和二年七月

うらなきてつ宵さうにむ蓮の飯もみちる餅うるたふよ

卯火を門に傳はるたふよる窓の煙草の光をひ

紫雲

昭和二年七月

紫雲の事あさこふぬきてほのかもなるかきき

ふききし小庭の紫雲の塵埃をまわかしなかり  
根を下したる

おふしの巻頭

老松の枝もなむ風雪あつたもといふ

ふりし雪をやるひとなふしのひさかたしき

夏山歌

昭和二年八月

夏もきぬ岩井みいさくさあわむみゆこさるる来ても

夏もきぬさ(き)なうささのわたりしうかひもなきわ

旅泊

昭和二年九月

おもむきつ宵港へ入りたけとてそは馴れりかて枕を

波もくねを重ねるもぬはるの夢を陸路をばなれり

秋夜

昭和二年九月

秋の十夜の花席

月なまるは秋はき

ふかひの席内あせり  
ききるは虫の音をきく

運動會

え

おふきの巻頭

あら心他より涼泳やな

あら水車り競走やな

あら西より庭球やゆ

秋草花

え

七種の秋草をいりぬ草ながら秋さく花はあけれ

すうり



棋

昭和六年九月

軍人さうも棋のすはかり残るを人たかな

服部順子氏 賀来家（下巻）

とつかるゝをほきて

千代の秋くらわさをほきて甲らんをひくみそむき

順子氏の婚儀をかきき

あつひふあそびをむきほすうみと眺めやうと実清水

お島樹歌歌（昭和六年十月）

外お島歌すわくせもなうみたれぬあそ

とあよとあ

有明月

昭和六年十月

山の女ねらうさう老杉の梢うろ有明月

新主加

（一）

黒金のすね造り崖居建ていさか新室ゆきせあや

世田の宮

永久王様下は初任のほきと奉る

龍の門ぬきを登るほきとわかに雲のふりきこせあ

同鳳凰の初儀たる物よりまわりの歌

君千代のせやうなう桐をほきて鳥を羽うちあな

少壮少町

昭和六年十月

玉簾のさうさう一枝たよ申さうつるををゆか

項羽

とよさうさうわらぬ故土の月をひくはかて

少女

城あそびをさうさうこたうわあをわねな君の

ますらを

車いあをほつにおわぬ怒り情のわたりせあや大和

ますらを

千代根

昭和六年十月

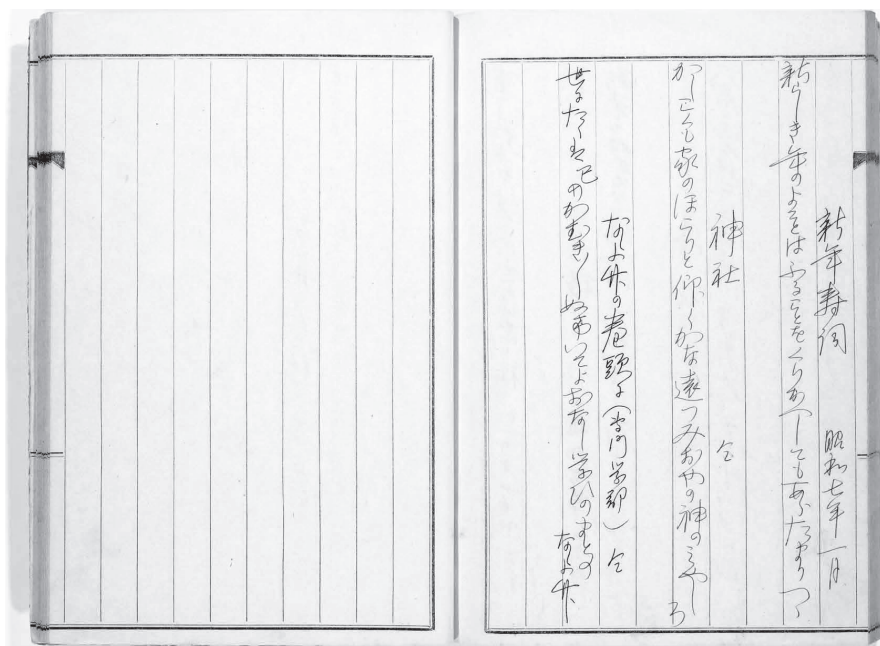
新来のぬかを海うほ大根の軒うらあそ

忠

大君のあはさけあほらなれたわね水さか

あきと

事いあはさけあほらなれたわね水さか



77



裏表紙

78